# 長野県埋蔵文化財センター年報 4

1987

財団法人

長野県埋蔵文化財センター

『長野県埋蔵文化財センター年報　４』正　誤　表

『長野県埋蔵文化財センター年報　４』に下記の誤りがありましたので御訂正ください

| 頁 | 行 | 誤 | 正 |
|---|---|---|---|
| 1 | 上から１７ | 島立遺跡群 | 島内遺跡群 |
| 2 | 下から１４ | 解明に務め、 | 解明に努め、 |
| 2 | 下から　８ | 墨色土器 | 墨書土器 |
| 6 | 下から１４ | 昭和62年10月13 | 昭和62年10月13日 |
| 6 | 下から　６ | 長頸瓶 | 長頸瓶 |
| １４ | 上から　７ | 土偶。石棒 | 土偶・石棒 |
| ２１ | 下から１０ | もとも全面が | もともと全面が |
| ２４ | 下から　１ | 一層は多くが | Ⅰ層は多くが |
| ３０ | 下から１３ | 鵜が島台式土器 | 鵜ガ島台式土器 |
| ３２ | 上から１４ | 北端部あたる | 北端部にあたる |
| ３９ | 下から　２ | 東の下面と西の上面 | 東の下位面と西の上位面 |
| ４３ | 上から１１ | 周囲１ｍの足場用 | 周囲１ｍに足場用 |
| ４７ | 下から　１ | Ｂ地区１８号 | Ｃ地区１８号 |
| ５２ | 下から　１ | 講習会等49～50頁 | 講習会等48～50頁 |
| ５３ | 上から　６ | 自然科学的産地固定法 | 自然科学的産地同定法 |
| ５３ | 上から２０ | 視察・研究地 | 視察・研修地 |
| ５３ | 下から　５ | 上田典夫 | 上田典男 |
| ５５ | 上から１７ | 塚原降明 | 塚原隆明 |

# 長野県埋蔵文化財センター年報

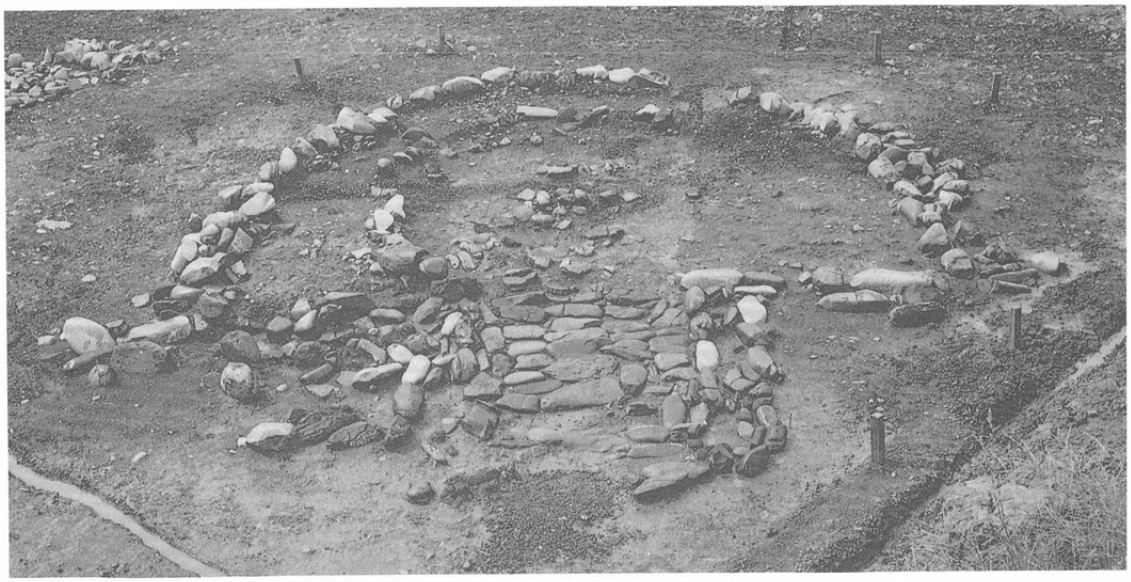
# 1987

財団法人

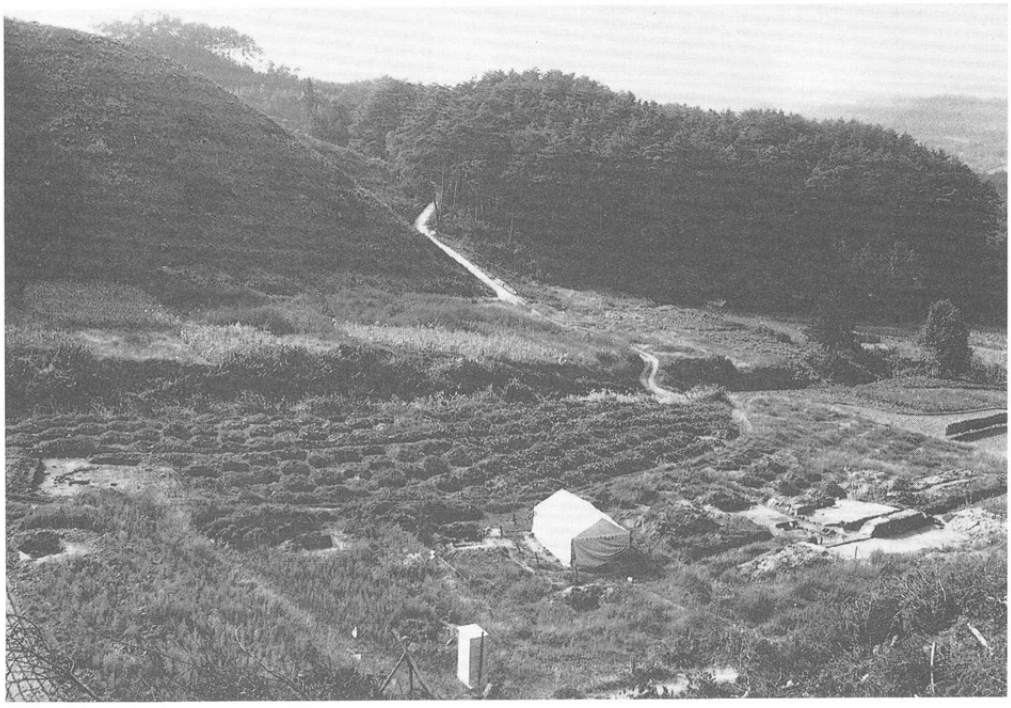
長野県埋蔵文化財センター

1　明科町北村遺跡遠景

2　北村遺跡発掘調査状況



3　明科町北村遺跡１号住居址



4　麻績村野口遺跡（西地区）遠景

5　佐久市岩村田栗毛坂遺跡（A地区）遠景

6　佐久市岩村田栗毛坂遺跡（B地区）遠景

7　佐久市岩村田栗毛坂遺跡（C地区）遠景

8　佐久市東地西祢ぶた・東祢ぶた遺跡遠景

# 序

㈶長野県埋蔵文化財センターも，昭和57年発足以来，ここに６年目を迎えました。

本年度，４月，長野市篠ノ井に「長野調査事務所」を新設し，「松塩筑調査事務所」「佐久調査事務所」を合せて３調査事務所で事業をすすめることになりました。また，これにともなって，当センターの事務局を長野調査事務所に移転しました。

長野調査事務所では，中央自動車道長野線建設に係る東筑摩郡麻績村・坂井村の３遺跡の発掘調査，松塩筑調査事務所では，同じく中央自動車道長野線建設に係る松本市，東筑摩郡明科町の２遺跡の発掘調査及び塩尻市，松本市，南安曇郡豊科町の32遺跡の整理作業，佐久調査事務所では，関越自動車道上越線建設に係る佐久市の12遺跡の発掘調査を実施し，多大の成果をおさめることができました。

個々の遺構・遺物については，本文でふれますが，なかでも，東筑摩郡明科町の北村遺跡では，当初まったく予期していなかった縄文時代・弥生時代の文化層が古代面下数mで確認され，縄文時代後期前半の敷石住居址26軒，400基をこえる墓壙群と190体余の人骨が検出されましたが，特に，190体余の人骨の出土は，内陸部では前例のないことであり考古学･人類学上貴重な発見といえるでしょう。

北村遺跡の調査は，予期せぬ大発見により，11月末発掘調査終了という調査計画を大幅に変更せざるを得ない状況となり，今まで前例のない冬期間の発掘調査を実施し，昭和63年３月中旬，一端，発掘調査を中止し，引きつづいて昭和63年度に調査を継続することになりました。この間，厳寒，積雪という悪条件のなかで発掘調査に従事した調査研究員，作業員のみなさんに敬意を表するとともに，厳しい工事工程の中で，こうした事態を理解し，御協力をくださった日本道路公団名古屋建設局をはじめ関係各位に深く感謝します。

発掘調査と同時に，普及･公開活動として，現地説明会，出土品展なども開催し，多数の方々の参観をいただきました。また，長年の念願であった「長野県埋蔵文化財センター紀要」第１号も発刊することができました。こうした文化財保護思想の啓蒙活動は，まだまだ十分とはいえませんが，今後とも努力をつづけていきたいと思います。

この間，昭和63年３月，中央自動車道長野線の岡谷インターチェンジと松本インターチェンジの間が開通しましたが，感慨の深いものがあります。

刊行にあたり，御協力をいただいた関係各位に対し，深謝し，今後とも御支援と御協力をお願いいたす次第です。

昭和63年３月

財団法人長野県埋蔵文化財センター
理事長　村　山　　正

# 目　　次

口　　絵
序
目　　次
Ⅰ　発掘調査及び整理作業の概要
1　中央自動車道長野線関係……1
〔松塩筑調査事務所〕
(1)　発掘調査の概要……1　(2)　整理作業の概要……2
〔長野調査事務所〕
(1)　発掘調査の概要……6
2　関越自動車道上越線関係……7
〔佐久調査事務所〕
(1)　発掘調査の概要……7　(2)　整理作業の概要……8
3　発掘調査遺跡……12
〈中央自動車道長野線〉
(1)　北中遺跡……12　(2)　北村遺跡……13
北村遺跡付近の地形と地質……16
(3)　野口遺跡……20　(4)　古司遺跡……22
(5)　子尾入遺跡……23
〈関越自動車道上越線〉
遺跡周辺の地形と地質……24
(1)　西林遺跡……26　(2)　千草場遺跡……27
(3)　城の口遺跡……29　(4)　東祢ぶた遺跡……30
(5)　西祢ぶた遺跡……32　(6･7)　丸山古墳群・丸山Ⅱ遺跡……34
(8)　西大久保遺跡……36　(9)　腰巻遺跡……37
(10)　栗毛坂遺跡……39　(11)　西赤座遺跡……44
(12)　枇杷坂遺跡……45
Ⅱ　普及・研究活動の概要
1　現地説明会……46
2　展示会……47
3　研究会・学習会……48
4　刊行物……50
Ⅲ　機構・事業の概要
1　機　構……51
(1)　組　織　(2)　事務所
2　事　業……51
(1)　理事会及び会計監査　(2)　調査事業
(3)　事業費　(4)　普及活動
(5)　職員研修

昭和62年度役員及び職員……55

## 口　絵


1　明科町北村遺跡遠景
2　北村遺跡発掘調査状況
3　明科町北村遺跡１号住居址
4　麻績村野口遺跡（西地区）遠景
5　佐久市岩村田栗毛坂遺跡（Ａ地区）遠景
6　佐久市岩村田栗毛坂遺跡（Ｂ地区）遠景
7　佐久市岩村田栗毛坂遺跡（Ｃ地区）遠景
8　佐久市東地西祢ぶた・東祢ぶた遺跡遠景


## 挿図目次


第１図　下神遺跡111号住居址出土土器一括 …… 3
第２図　Ⅲ期の食膳具（１～９神戸遺跡25号住居址）
　　Ⅳ期の食膳具（10～41北方遺跡15号住居址）…… 4
第３図　各遺跡出土墨書土器（縮尺不同）１～３：下神遺跡，４：南栗遺跡…… 5
第４図　佐久市岩村田栗毛坂遺跡周辺…… 8
第５図　中央自動車道長野線にかかわる明科町内遺跡分布図…… 9
第６図　中央自動車道長野線にかかわる麻績村・坂井村内遺跡分布図…… 9
第７図　関越自動車道上越線にかかわる佐久市内遺跡分布図……10
第８図　北中遺跡全体図（部分）……12
第９図　北村遺跡配石検出状況と人骨出土状況……15
第10図　埋葬人骨出土状態……15
第11図　明科町光付近の地形……17
第12図　明科町北村遺跡付近の層序断面図……17
第13図　麻績村野口遺跡のオンドル様施設をもつ２号竪穴住居址……21
第14図　佐久市遺跡周辺の地質図……25
第15図　土層模式図……25
第16図　千草場遺跡全体図……28
第17図　千草場遺跡・近世塚実測図……28
第18図　城の口遺跡全体図……29
第19図　東祢ぶた遺跡屋外単独埋甕出土状態・同出土土器……31
第20図　西祢ぶた遺跡全体図……33
第21図　西祢ぶた遺跡５号住居址カマド……33
第22図　丸山古墳群・丸山Ⅱ遺跡全体図……35
第23図　西大久保遺跡全体図……36
第24図　腰巻遺跡全体図……38
第25図　栗毛坂遺跡概略図……39
第26図　栗毛坂遺跡Ａ地区出土土器実測図……40
第27図　栗毛坂遺跡Ａ地区集石群……40
第28図　栗毛坂遺跡Ｂ地区（東部）全体図……41
第29図　栗毛坂遺跡Ｃ地区全体図……42
第30図　栗毛坂遺跡Ｂ地区113号住居址出土土器 ……42
第31図　西赤座遺跡耕地整理址……44
第32図　西赤座遺跡耕地整理址断面図……44
第33図　枇杷坂遺跡１号住居址平面図……45
第34図　現地説明会風景……46
第35図　展示会風景……48

第１表　昭和62年度中央自動車道長野線及び関越自動車道上越線関連事業一覧……11
第２表　北村遺跡付近の水質……18
第３表　北村遺跡北方，小倉沢における別所累層からの湧出水……18

# Ⅰ　発掘調査及び整理作業の概要

昭和62年度は，57年度以来継続している中央自動車道長野線（以下「長野線」とする）と，61年の10月から開始された関越自動車道上越線（以下「上越線」とする）関連事業が中心となったが，発掘調査する遺跡の関係や今後の事業推進上の理由から，松塩筑，佐久両調査事務所のほかに新たに４月から「長野調査事務所」が長野市篠ノ井に新設され，３調査事務所体制が発足した。

以下，３調査事務所ごとにその概要を述べることにしたい。

## １　中央自動車道長野線関係（第５・６図）

〔松塩筑調査事務所〕

### (1)　発掘調査の概要

調査区域　　松本市・明科町

調査遺跡数　　２遺跡（松本市北中遺跡・明科町北村遺跡）

調査総面積　　11,880㎡（北中895㎡，北村10,985㎡）

発掘調査期間　　昭和62年４月６日～昭和63年３月11日

本年度調査は，松本市内北中遺跡と東筑摩郡明科町内北村遺跡が対象となった。

北中遺跡は，昨年度からの継続調査であり，本年度調査の結果，あらたに火葬墓例を加えるにとどまり，遺跡の性格について特に見直しを迫られるほどの新事実は見つかっていない。本遺跡は，島立遺跡群のほぼ中央部の中・近世集落内における墓域の一部であろう。

北村遺跡は，明科町南端の光地区北村地籍にあり，ＪＲ篠ノ井線と国道19号線をはさみ，犀川段丘端を西限とし，東は長峰山から続く山麓裾まで広がる河岸段丘と扇状地形上に，全体とすれば東から西に向く緩傾斜地に立地し，標高は550～560ｍである。

この調査対象域は，用地内ほぼ350ｍ×60ｍであるが，南北にＪＲ篠ノ井線・国道19号線が横切っており，これにかかわる一部工事着工とか，明け渡し未了の宅地が散在するなどの事情もあり，調査進行上，それなりの対応に迫られた。

遺跡は，当初，奈良・平安時代集落跡としておさえられており，竪穴住居址・掘立柱建物址等を中心とする遺構が，東山麓部より西側の段丘面まで広がっていることが確認された。ここでの該期集落のあり方は，前年度までに累積されていた，松本平沖積地帯における竪穴住居と掘立柱建物との組合せからなる集落構成類型を示しておるものの，しいていうならば，竪穴住居１に対して掘立柱建物３の割合ほどの数量比が，松本平中央部との相違点といえそうである。

古代面調査終了後の地層確認で，地表下３～６ｍ地点より，縄文時代中期末土器及び後期初～中頃まで，ほぼ連続する柄鏡形敷石住居群，配石墓群，集石を中心とする縄文遺跡が複合することを確認した。予想をはるかに越す作業量であり，そのために，整理班，長野調査事務所の応援を得ながら調査体制を再編成し，さらに調査日程の大幅組替えなどに

より対応することになった。

調査結果から，ここの地形基盤である犀川段丘礫層と，東山麓方向からの沖積堆を掘り込むことと，犀川から持ち込む硬砂岩・花崗岩，東山麓からの砂岩礫を多用する敷石・配石・集石・立石などを組合せた住居群と墓群に特徴をもっている。特に墓群にあっては，埋葬姿勢を保つ人骨を遺存させているものの多いことが注目される。

主たる成果とすれば，犀川段丘を覆う沖積地帯における縄文遺跡のあり方，縄文後期初～後期中頃に至る墓制のあり方，墓域と住居域のあり方，さらに特記すべきは，人骨分析を通して考古学・人類学・環境生態学等々，人を取りまく学際的観点に立った遺跡研究に耐え得る資料提示が可能ではないかという点にある。なお，人骨については形態学的・化学的分析を専門機関に依頼してある。なお，遺跡の一部は次年度継続調査の予定である。

## (2) 整理作業の概要

### ア　塩尻市内の整理

#### (ア)　塩尻市内その1

前年度までの作業を継続し，年度末報告書刊行にむけた作業をすすめてきた。この間には，松塩筑調査事務所外へ所属することになった関係者も含めた編集会議を通し，内容調整などについて検討を重ねてきた。内容的には，八窪遺跡の縄文早期土器群，御堂垣外遺跡の配石住居址群，竜神平遺跡の集石土壙等が縄文時代関係で，また，竜神平遺跡の古墳時代祭祀的遺構等に関する考察に工夫がこらされている。

#### (イ)　塩尻市内その2

前年度までの作業を継続し，遺物図化・図版作成・原稿執筆等の作業がすすめられてきた。この間には，名大　斉藤孝正氏，日本歴民博　吉岡康暢氏を招へいして，焼物・集落等に関する指導を得ながら，質量ともに豊かな平安後期集落吉田川西遺跡の性格解明に務め，併せて，ここで注目されてきた焼物類のあり方について鋭意検討を重ねつつ，発刊をめざした作業を続けてきている。

### イ　松本市内，豊科町内の整理

住居址，掘立柱建物址だけでも1,370軒，これに伴う約3,000箱にのぼる遺物の観察・計測・復元・図化・写真撮影等の作業が続けられている。観察作業の中では，特に下神遺跡を中心にした大量の墨色土器が，同一文字，残される場所，所属時期等に特色を持つなど，古代集落の構造にかかわる貴重な資料を新たにつけ加えつつある。報告書は11分冊計画であるが，そのうちの南中以北，上手木戸遺跡分については一部原稿執筆が進行している。

なお，整理途上ではあるが，遺構・遺物について若干の見通しなどについて以下記しておきたい。

松本市内・豊科町内分12遺跡の整理作業は，調査研究員11名，整理作業員15名が従事し，本年度より本格的に着手した。整理作業の中心を全遺物の観察・計測・復元におき，

併行して，遺物の実測，遺構図の検討・作図，遺構内容の検討，金属器の保存処理等も行ってきたが，整理作業は全て進行中であり，まとめる段階には至っていない。

整理箱約3,000の中で，その大部分を占めるのは古代に属する土器である。杯・椀・皿等の食膳具が約12,000の個体，甕・壺等の煮沸・貯蔵具約2,700個体が最終実測数になる見込みである。このうち観察，器種別重量・個体数等の計測を終了したもの60%，実測終了4.5%が現況でありその全貌をつかみ得ていない。他に，400点余の中・近世陶磁器類，約2,500点の鉄製品・鉄滓，300点を越す銭貨を中心にした銅製品，砥石，石臼等の石器類，木製品，漆製品があり，縄文・弥生時代の遺物もある。

センターが発掘した松本市内の諸遺跡を，一つの大きなまとまりとしてとらえる方針で調査がなされており，報告書もその方向でまとめられるため，基本的な部分での統一したとらえが必要となり，現在その作業も進められている。古代土器の時期区分もそのなかのひとつであり，食膳具の変遷は大きく次の五期に区分してとらえられることが明確になってきた。

第Ⅰ期　須恵器と土師器で構成される。須恵器には杯蓋，無台杯，高台杯，内面に返りのある蓋，高杯があり，土師器には非ロクロ成形の杯，高杯があり，杯は有稜杯，内面黒色の杯がある。

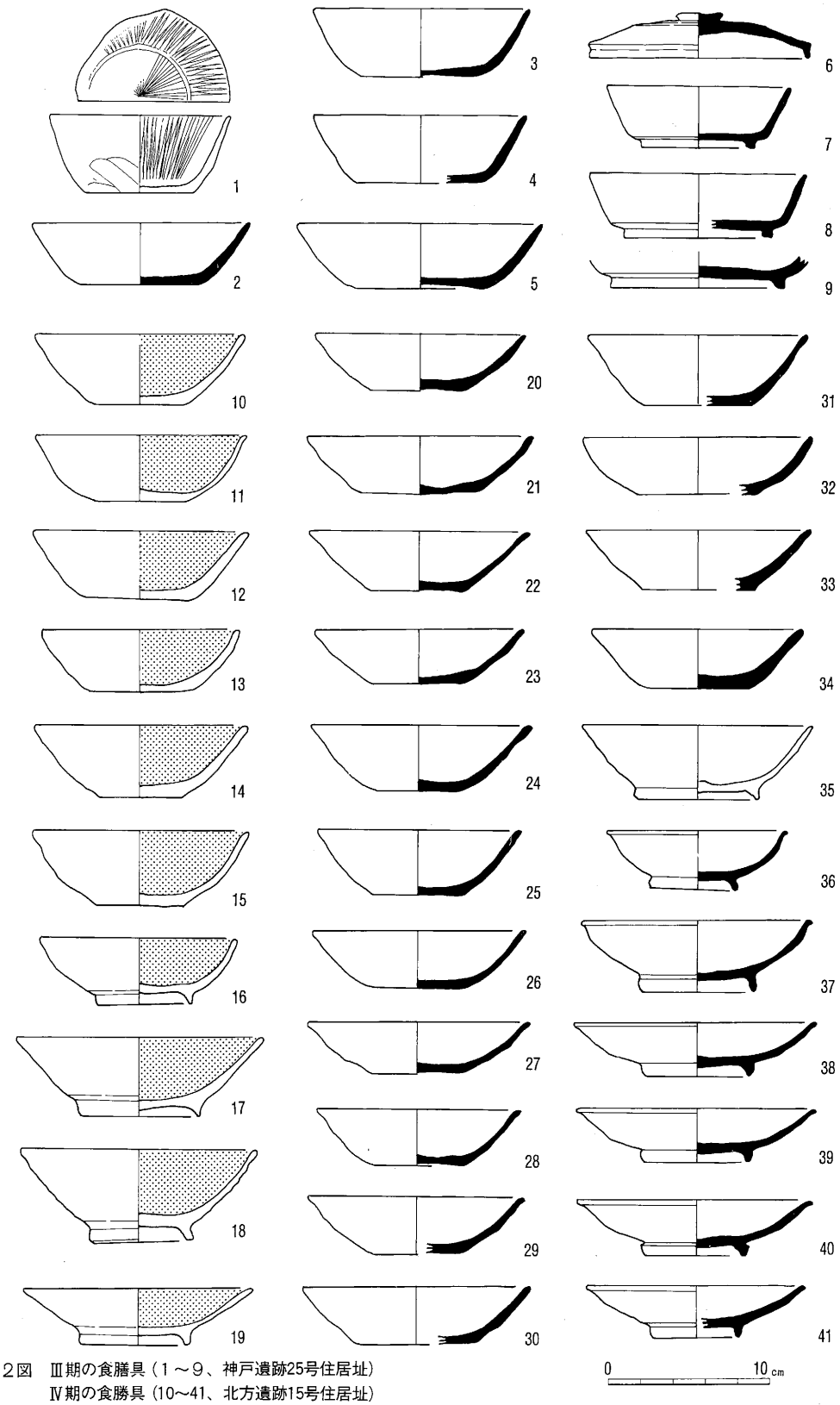
第Ⅱ期　須恵器と土師器で構成される。須恵器は高台杯，無台杯が主体で，美濃須衛窯産の製品も含まれる。非ロクロ成形の土師器杯が少量ある。

第Ⅲ期　須恵器とロクロ成形の黒色土器を主体に構成される。須恵器は在地窯が最大に稼動する段階で，法量分化した高台杯と一法量の無台杯がある。黒色土器には杯と有台の皿がある。土師器には甲斐型杯がはいる。後半，灰釉陶器が移入され始める。（図２・１～９）

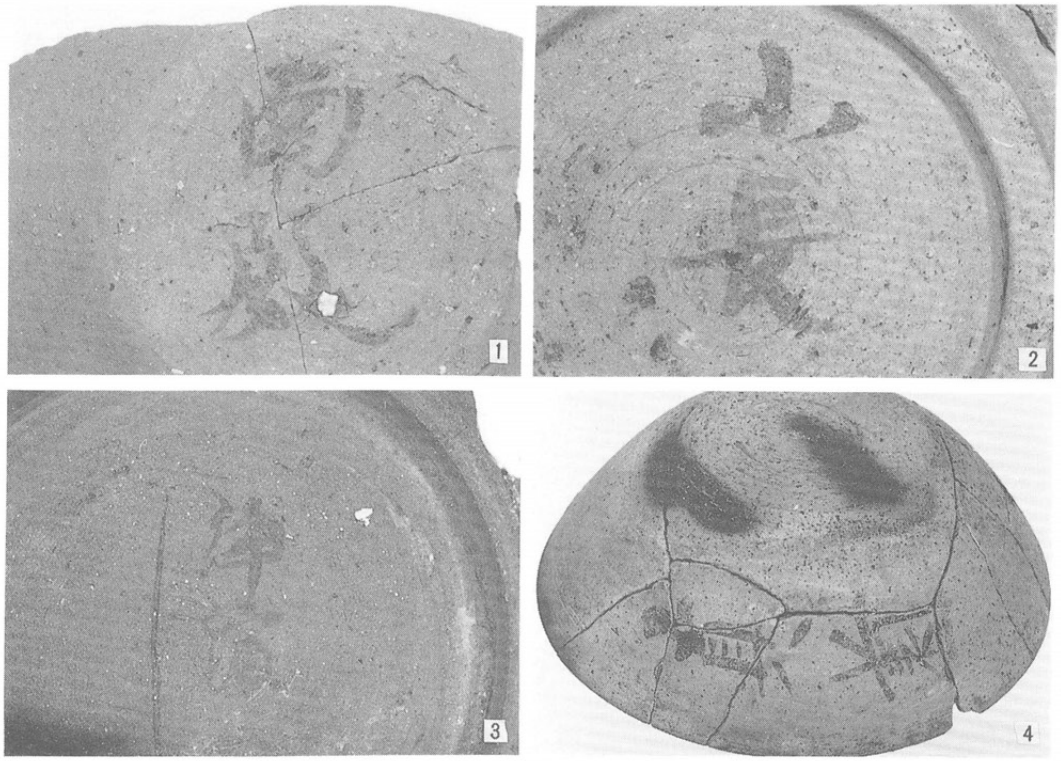
第Ⅳ期　ロクロ成形の黒色土器，須恵器，灰釉陶器によって構成される。黒色土器には杯，椀，鉢等があり，須恵器は無台杯一器種となり軟質化する。灰釉陶器は食膳具の中に占める比率を高めつつある。（図２・10～41，図１）

第Ⅴ期　須恵器，黒色土器にかわってロクロ成形の土師器が主体を占め，灰釉陶器も

第１図　下神遺跡111号住居址出土土器一括




第２図　Ⅲ期の食膳具（１～９、神戸遺跡25号住居址）
Ⅳ期の食勝具（10～41、北方遺跡15号住居址）



第3図　各遺跡出土墨書土器（縮尺不同）1～3：下神遺跡、4：南栗遺跡

移入される。土師器には杯，椀，皿，盤，鉢等がある。黒色土器は椀形態のみ残る。東濃産灰釉陶器が食膳具中に占める割合が高くなる。

以上のような変化がとらえられる。さらに整理が進む中で各期とも細分が可能になってこよう。

土器の中で注目されるものに墨書土器がある。既に本センター年報2・3でも一部報告されているが，さらに新しく発見されたものも多くその数を増している。現在長野県下で確認されている数は，157遺跡，約980個体である（金原正調査研究員の集成による。）が，松本市内分7遺跡からの出土量は最終的に約750個体を越すものと思われる。このうちの約500個体は下神遺跡より出土しており遺跡の性格を考えるうえで重要な資料となってこよう。

下神遺跡からは既に報告されているように，「草茂」や「重」「而而」等の文字が出土しているが，今回「南殿」の文字が発見された（第3図）。「南殿」は，南面する御殿の総称，正殿の意があり（彰国社刊，建築大辞典）これも遺跡の性格を知るうえで貴重な資料といえよう。

同一文字が竪穴住居址，溝，自然流路等から出土していること，殆どの墨書土器がIII期後半からIV期に属していること等をみると，集落の単位や構成，使用状況を復元するうえでの鍵をにぎる資料といえる。

遺構については年報２・３で遺跡別に報告されているので省くが，集落の大きな動きをみてみると，古墳時代末，南栗・北栗・三の宮遺跡で散在的に集落が営まれ始め，奈良時代前半に集落は継続されるが大きな展開はみせない。そのなかにあって，南栗遺跡では強い方位規制をうけた掘立柱建物群が構築される。奈良時代後半から平安時代前半，調査遺跡全てで集落は大規模に展開する。大規模集落は比較的短時間に消滅していく。下神・三の宮・北方遺跡には一辺10mに及ぶ規模を持つ大形住居が構築され，集落の中に占める位置が注目される。平安時代中頃から後半には集落は規模を縮め散在的に継続するが，竪穴住居の方位規制は弛緩し規模も小型化していく。後半に至り集落の存在自体が不明になり中世的景観への移動が感じられる。

中世になると古代集落が営まれた地域は居住域として利用される部分は少なくなり，水田等の生産域や墓域として利用されるようになる。北栗遺跡から三の宮遺跡にかけて広がる新村・島立条里遺構は，この時期の開発による可能性が強い。

以上，今年度の整理を通してとらえられてきた一部について述べてきた。今後遺物と遺構を関連させた検討を進め，さらに，周辺遺跡との関連，土地利用，自然環境，さらに他分野での研究成果からの検討等を通して，松本平南西部における古代から中・近世にかけての集落の動きを復元していきたい。

〔長野調査事務所〕

(1) 発掘調査の概要

調査区域　麻績村・坂井村

調査遺跡数　３遺跡（麻績村野口，子尾入遺跡，麻績村坂井村古司遺跡）

調査総面積　11,380m²（野口9,700m²，子尾入1,400m²，古司280m²）

発掘調査期間　昭和62年４月20日～昭和62年10月13

調査対象遺跡は３遺跡であったが，古司・子尾入両遺跡はその中心部に当らず，結果的には遺構の検出もなく，遺物も微量であったので調査を予定より早く終了した。もう１つの野口遺跡は，事前の確認調査で平安時代の火葬墓や土師器片など遺物の出土がわかっていたので，その部分を中心に調査が進められた。その結果，平安時代の竪穴住居址２軒，火葬墓１，土壙１，炭焼窯？１の遺構と，平安から中・近世にいたる土器が出土している。成果はわずかであったが，住居址１軒の床面からはオンドル様の床下暖房施設と考えられる溝が検出され話題を呼んだ。県下では初めて，全国的にも珍しく，今後住居址研究に１ページを加えたといえる。また，外容器と蓋をもつ長頸瓶使用の火葬墓や，鉄滓のみを伴う浅い土壙，炭焼窯らしい遺構など，今後に興味ある課題を提供したといえよう。

筑北地方初の平安時代住居址等の発掘調査であったが，遺構・遺物個々の問題とともに，山間のこうした〝山棲み〟的な遺跡のあり方，すなわち水田にしろ畑作にしろ，集落前面に豊かな生産域の展開する一般的な遺跡と相当かけ離れた野口遺跡のあり方は，平安時代生活面の一端を解くカギとして充分検討されるべきテーマであろう。

## 2．関越自動車道上越線関係（第７図）

〔佐久調査事務所〕

### (1) 発掘調査の概要

調 査 区 域　佐久市岩村田地区・平根地区・東地地区

調査遺跡数　12遺跡（岩村田地区３遺跡，平根地区４遺跡，東地地区５遺跡）

調査総面積　104,674m²

発掘調査期間　昭和62年４月６日～昭和62年12月26日

関越自動車道上越線に係る発掘調査は，昭和61年10月，佐久調査事務所を開設し，佐久市岩村田地区栗毛坂遺跡の調査から開始した。昭和61年度の調査は，職員７名，調査期間も10月からという短期間ではあったが，およそ9,000m²の発掘調査を実施した。昭和62年度は，職員を28名と大幅に増員し，４月より調査を開始し，12月末に現場の発掘作業を終了した。この間，用地買収，工事工程など諸般の事情により，調査計画を変更せざるを得ない状況もあったが，当初の計画よりおよそ１ケ月おくれて，所期の目的を達することができた。各遺跡の調査の状況は各項でふれるが，ここでは，昭和62年度の発掘調査の概要について記したい。

昭和62年度に調査を実施した遺跡を立地状況からみると，湯川両岸の浅間山南麓端の台地上の遺跡，平尾富士山麓の遺跡，香坂谷の八風山々系の南向き斜面に位置する遺跡の三つに大別できる。浅間山南麓端に位置する岩村田地区の栗毛坂・西赤座・枇杷坂の３遺跡は，古墳時代～平安時代を中心とする集落址であり，昨年度の調査分も合せて，竪穴住居址106軒とほぼ同数の掘立柱建物址(108棟)，土壙，溝，畠址と思われる畝状遺構などが検出された。関越自動車道建設用地内という限られた範囲の調査ではあるが，上記のように多くの遺構が検出されたことは，この地域の集落の性格やあり方，佐久平の土器編年を考えるうえで大きな役割をはたすものと思われる。なお，北方およそ2,000m，同じ浅間山南麓に鋳物師屋遺跡群（佐久市，小諸市，御代田町にまたがる大遺跡群。４年間にわたる発掘調査で，竪穴住居址440軒，掘立柱建物址430棟などが検出されている）が位置するが，これら周辺の遺跡との関連についても今後検討を加えていかなければならない。また，湯川右岸低位段丘上に位置する栗毛坂遺跡Ａ地区では，佐久平ではあまり例を見ない縄文時代早期末から前期の土器片多数とともに，黒曜石の剝片や加工痕のある礫を含む集石群が検出されたことは，この遺構が石器製作址と想定されることもあって注目される。湯川左岸低位段丘上に位置する腰巻遺跡では，古墳・平安時代の竪穴住居址各１軒と，栗毛坂遺跡と同様な畝状遺構が検出されている。

平尾富士山麓に位置する丸山古墳群の本年度の調査は，古墳の所在の有無を確認するための試掘調査であったが，路線内では古墳を確認することはできなかった。しかし，弥生時代の竪穴住居址２軒が検出された。この住居址は，立地，形態が他に比して特異であり興味深いものがある。

香坂谷の八風山々系南向き斜面に位置する遺跡は，規模が小さいものが多く，また，路

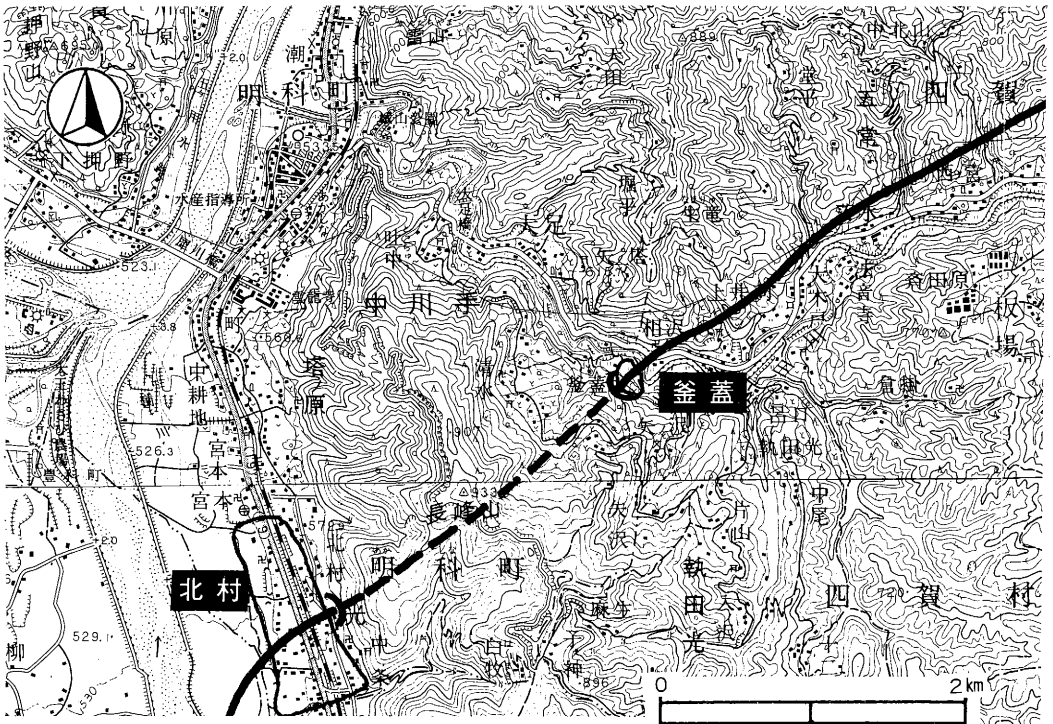
線が遺跡の中心をはずれたところを通過していることもあって，検出された遺構の数も，出土遺物の量も少ない。東祢ぶた・西祢ぶたの両遺跡では，平安時代の竪穴住居址が数軒検出されているが，農耕に適さない山間部の谷間に立地する小さな集落であろう。こうした山間部の小集落は県内の各地で確認されているところではあるが，その生活の基盤が何であったのか関心が持たれる。また，東祢ぶた遺跡では縄文時代中期後半の敷石住居址が検出されている。干草場遺跡では，寛永通宝の出土した近世のものと思われる塚を１基調査したが，県内での類例が少ないだけに注目される。

本年度の調査の概要は以上のとおりであるが，昭和61・62年度の発掘調査で岩村田地区の調査は大半が終了し，昭和63年度の調査の主体は平根及び東地地区へ移っていく。昭和63年度をもって，県境～佐久インターチェンジ間の調査はすべて終了する予定である。

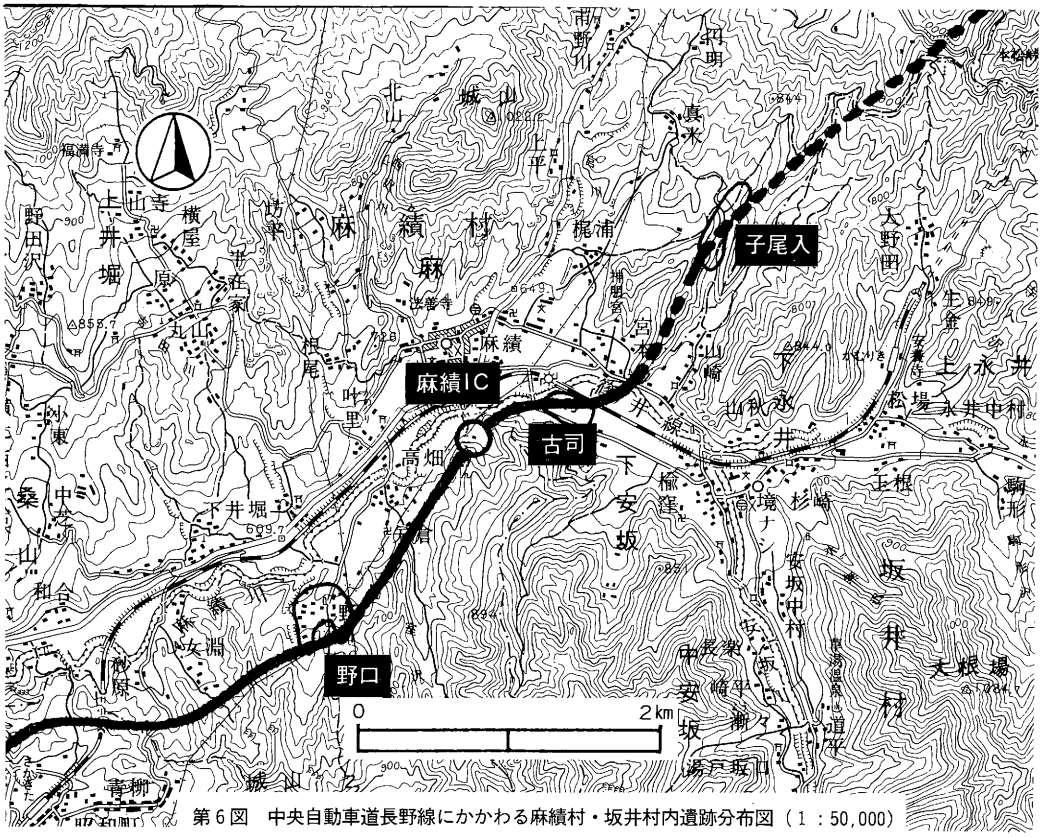
### (2) 整理作業の概要

本年度の発掘調査は，12月末に終了したが，一部10月より整理作業に入っている。現場で作成した実測図等の記録類の点検・修正・加筆及び遺物の洗浄・注記は終了し，各遺構出土の遺物の検討，遺物の接合・復元，金属器・炭化材の応急保存処理等の作業に合せて，遺物実測等の記録化にも着手している。本格的な整理作業及び報告書作成へ向けての計画は次年度に立案する予定である。

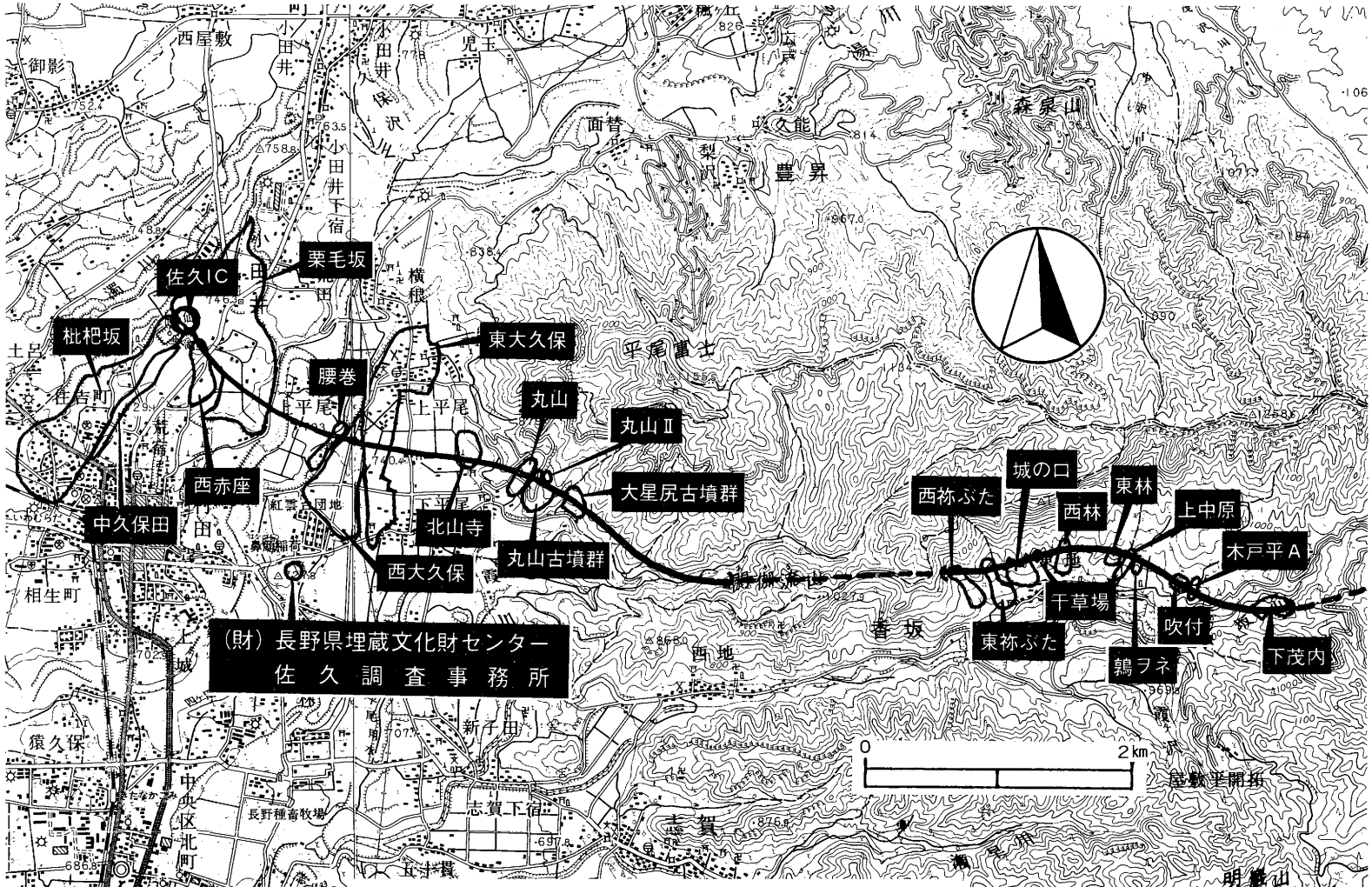
第４図　佐久市岩村田栗毛坂遺跡周辺




第5図　中央自動車道長野線にかかわる明科町内遺跡分布図（1：50,000）




第6図　中央自動車道長野線にかかわる麻績村・坂井村内遺跡分布図（1：50,000）




第7図　関越自動車道上越線にかかわる佐久市内の遺跡分布図（1：50,000）

1　中央自動車道長野線　(1)　発掘作業

| 市町村 | 遺跡名 | 発掘調査面積 m² 調査対象面積 | 62年度調査面積 | 63年度調査面積 | 発掘調査期間 | 日 調査日数 | 人 作業員数 | 発掘調査の状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 松本 | 1 北中 | 12,760 | 895 | 0 | 4.6～4.20 | 13 | 76 | 中・近世　土壙32 | |
| 明科 | 2 北村 | 21,000 | 10,985 | 4,592 | 4.6～63.3.11 | 166 | 8,527 | 縄文～平安　住居址41，建物址41，土壙990，縄文人骨190体 | |
| 麻績 | 3 野口 | 9,700 | 9,700 | 0 | 7.8～10.13 | 62 | 83 | 平安　住居址2，土壙1 | |
| 坂井 | 4 古司 | 14,500 | 280 | 0 | 4.20～5.11 | 12 | 55 | 遺物若干出土 | |
| | 5 子尾入 | 12,800 | 1,400 | 0 | 4.23～5.27 | 21 | 0 | 遺物若干出土 | |
| 合計 | | 70,760 | 23,260 | 4,592 | 4.6～63.3.11 | 274 | 8,741 | 住居址43，建物址41，土壙1,023　他 | |

(2)整理作業

| 地区名 | 遺跡名 | 発掘調査面積 | 整理作業の状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 1　塩尻市その1 | 青木沢　青木沢東　八窪　大原　北山　御堂垣外　栗木沢　ヨケ　樋口　高山城址　竜神　竜神平　山の神　中原　犬原　上木戸　千本原　高田　吉田向井 | 127,254 | 63.3.31　報告書刊行 | |
| 2　塩尻市その2 | 吉田川西 | 25,100 | 遺物の整理(実測)，遺構・遺物図版作成，原稿執筆(継続中) | |
| 3　松本市　豊科町 | 神戸　上二子　中二子　下神　南栗　北栗　三の宮　新村島立条里　南中　北中　北方　上手木戸 | 278,730 | 諸記録の整理（実測図，写真）<br>遺物の整理（実測）<br>} 遺構・遺物図版作成（継続中） | |

2　関越自動車道上越線

| 地区 | 遺跡名 | 発掘調査面積 m² 調査対象面積 | 62年度調査面積 | 63年度調査面積 | 発掘調査期間 | 日 調査日数 | 人 作業員数 | 発掘調査の状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 東地 | 1 西林 | 2,400 | 2,400 | 0 | 9.1～9.8 | 6 | 121 | 遺物若干出土 | |
| | 2 千草場 | 1,700 | 1,700 | 0 | 9.7～10.8<br>11.17～11.20 | 29 | 228 | 平安・近世　土壙1 | |
| | 3 城の口 | 700 | 700 | 0 | 9.10～10.5 | 17 | 147 | 遺物若干出土 | |
| | 4 東祢ぶた | 7,400 | 7,400 | 0 | 8.17～10.5 | 34 | 465 | 縄文・平安　住居址4，土壙5，土器集中区3，屋外埋甕1 | |
| | 5 西祢ぶた | 2,300 | 2,300 | 0 | 8.17～10.13 | 44 | 197 | 縄文・平安　住居址6，建物址1 | |
| 平根 | 6 丸山古墳群 | 22,000 | 2,200 | 0 | 9.28～11.30 | 44 | 884 | 調査対象面積の1/10の試掘調査　古墳確認されず | |
| | 7 丸山Ⅱ | 3,000 | 3,000 | 0 | 同上 | 上に含む | 上に含む | 縄文・弥生　住居址2，土壙8 | |
| | 8 西大久保 | 6,400 | 5,900 | 500 | 9.21～10.8<br>11.26～12.9 | 20 | 157 | 縄文・平安　遺物若干出土 | |
| | 9 腰巻 | 5,300 | 3,300 | 2,000 | 9.24～12.5 | 47 | 571 | 縄文～近世　住居址2　溝5 | |
| 岩村田 | 10 栗毛坂 | 78,500 | 61,744 | 7,800 | 4.6～9.17<br>11.10～12.26 | 166 | 7,137 | 縄文～中世　住居址101，建物址100，土壙571，溝　畠址他 | |
| | 11 西赤座 | 6,700 | 5,700 | 1,000 | 4.13～6.25 | 60 | 1,688 | 奈良～近世　土壙43，溝，耕地整理址 | |
| | 12 枇杷坂 | 16,000 | 8,330 | 7,670 | 10.5～11.19 | 34 | 446 | 平安　住居址3，土壙5，溝3 | |
| 合計 | | 152,400 | 104,674 | 18,970 | 4.6～12.26 | 501 | 12,041 | 住居址118　建物址101，土壙633　他 | |
| 発掘調査合計 | | 223,160 | 127,934 | 23,562 | 4.6～63.3.11 | 775 | 20,782 | 住居址161，建物址142，土壙1,656　他 | |

第1表　昭和62年度中央自動車道長野線及び関越自動車道上越線関連事業

## 3．発掘調査遺跡
〈中央自動車道長野線〉

### (1) 北中遺跡

所　在　地：松本市大字島内字古堂5677番地ほか
調 査 期 間：昭和62年４月６日～同年４月20日
調 査 面 積：895m²（総計12,760m²）
遺跡の立地：旧梓川によって形成された中州性微高地上
時代と時期：中世後半，近世後半～近代
遺跡の特徴：中世の墓域・生産域，近世後半～近代の居住域

主な検出遺構

| 遺構／時期 | 掘立柱建物址 | 土　壙 | 溝 | 柵列 | 火葬墓 |
|---|---|---|---|---|---|
| 中　世 | | 4（約110） | | | 1(8) |
| 近世～近代 | (1) | 27(約100) | (1) | (1) | |

（　）総数

主な検出遺物

土器・陶磁器：内耳土器，中近世・近代陶磁器
その他：銭貨

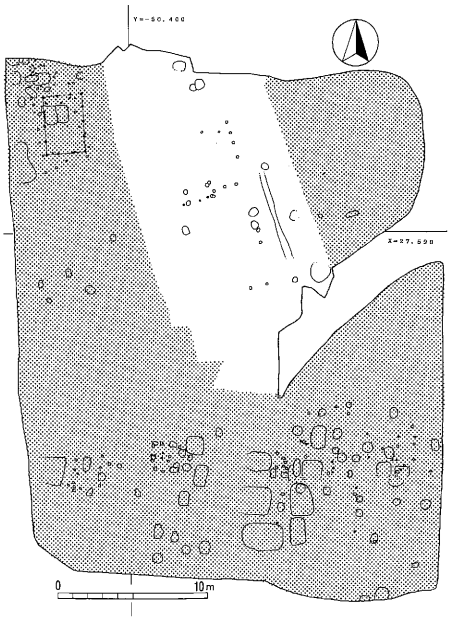
前年度より継続した２年次目の調査であり，本年度で用地内の調査は終了した。短期間ではあったが，前年度に共通する時期の遺構を確認することができた。

中世遺構では，遺存状態のよい火葬墓を１基検出した。底部に礫を敷いた南北に長い隅丸長方形で，壁面上部の焼土化が顕著であった。北半に頭骨と見られる骨片が集中し，覆土下層中央部より北宋銭が６枚出土した。本遺跡火葬墓の典型例と言える。前年に比し密集度は落ちるが，同様な覆土の土壙も数基検出した。

近世～近代遺構では，地区南東端の土壙より陶磁器類がまとまって出土した例が注目される。前年にも同様な遺物を伴う土壙が確認されたが，共に大日堂敷地縁にあることから関係が深いものと考えられる。

その他集石を伴う土壙や大日堂付属施設と思われる柱穴も確認できたが，調査区南端に広がる墓域の北限をほぼ見出すことができた点は，本年度調査の特筆すべき成果と言えるであろう。

（竹内　稔）




（網目部分は昨年度調査）

第８図　北中遺跡全体図（部分）（１：1,000）

## (2) 北村遺跡

所　在　地：東筑摩郡明科町大字光北村341番地ほか

調 査 期 間：昭和62年４月６日～昭和63年３月11日

調 査 面 積：21,000m²（昭和62年調査済面積　約11,000m²）

遺 跡 立 地：犀川右岸段丘面の沖積扇状地上

時代と時期：縄文時代中期・後期，弥生時代後期，奈良時代，平安時代

遺跡の特徴：縄文時代中期中葉～後期前葉の集落，奈良～平安時代の集落

主な検出遺構

| 遺構／時期 | 住居址 | 掘立柱建物址 | 土壙墓配石墓 | 集　石 | 土器集中 | 柵　列 | 溝 | 井　戸 | 土　坑 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 縄文 | 26 | — | 約480 | 約30 | 5 | — | — | — | 約480 |
| 奈良～平安 | 15 | 39 | — | — | — | 5 | 25 | 2 | |

主な出土遺物

土　　器：縄文中期土器・縄文後期土器・弥生後期土器・土師器・須恵器・灰釉陶器

石　　器：打製石斧・磨製石斧・石鏃・凹石・磨石・石皿・石錐・石錘・石匙・砥石

土製品・石製品：ミニチュア土器・土偶・石棒・ペンダント状石器・紡錘車・円面硯

鉄 製 品：刀子・紡錘車

自然遺物：人骨（約180うちほぼ完存55）・獣骨

明科町光地区は，ＪＲ篠ノ井線の明科駅と田沢駅のほぼ中間に位置し，犀川右岸段丘上を，ＪＲ線と国道19号線に沿って南北に集落が形成されている。明科町内の遺跡は，その多くが河岸段丘上で確認されており，この北村遺跡の場合も例外ではない。遺跡の南北は，東部長峰山地より発する奥沢と小倉沢とによって画され，推定約24万m²の面積を有する。今回は，遺跡のほぼ中央を東西に横断する中央道長野線の用地21,000m²が調査対象となった。ただし，用地内の残件や工事工程との調整等により，今年度実施された調査面積は約11,000m²にとどまる。

ところで本遺跡は，前年度までの分布調査の成果から古代集落遺跡であろうと推定されてきた。実際に今回の調査によって，別表にみられるような遺構が段丘上のほぼ全面にわたって検出されている。一方で，地形形成過程を把握する意味で設けたトレンチから，縄文時代中～後期の遺物が出土したことを端緒とし，該期の集落が確認できたことは，当初の予想を上回る成果であった。しかも，ＪＲ線東側で検出された約180体もの人骨を伴う土壙群の存在は，本遺跡の評価に大きな比重を占めることになるばかりか，全国的にも例の少ない貴重な資料となった。

現在も調査が進行しているため整理作業には未着手ではあるが，以下本遺跡を代表する縄文期の柄鏡形敷石住居址と配石墓を中心に概略を述べる。

縄文時代の集落は，長峰山地西斜面から供給される砂礫土によって形成された小扇状地（段丘堆積物II群）上に立地し，標高は約550m内外を測る。ただし，扇状地の広がりに併せて，東側山麓部から西側段丘端へ向け緩やかな傾斜をみせる。集落断絶後は，さらに活発な沖積作用

による土砂の被覆を受けたため，現地表下３ｍ～７ｍに埋没することになる。集落の主たる構成要素は，柄鏡形住居址，土壙，集石であり，加曽利ＥⅢ期頃に形成され始めてから後期中葉に至るまでの間ほとんど断絶がみられない。約480を数える土壙は，集落の北東部に存在する崖錐の裾を南から西へ取り巻くように群在する。一方，住居址は，特に居住域を形成することはなく土壙群と重複し，さらに南西方向へ散在しながら広がる。集石はその規模によって大小２群に大別され，前者は硬質砂岩や花崗岩の巨礫を用いて複数の土壙を覆う状態で存在し，後者は土偶。石棒等を伴いながら集落内に散在する傾向にある。その他，土器捨て場とみられる遺物集中箇所も存在する。

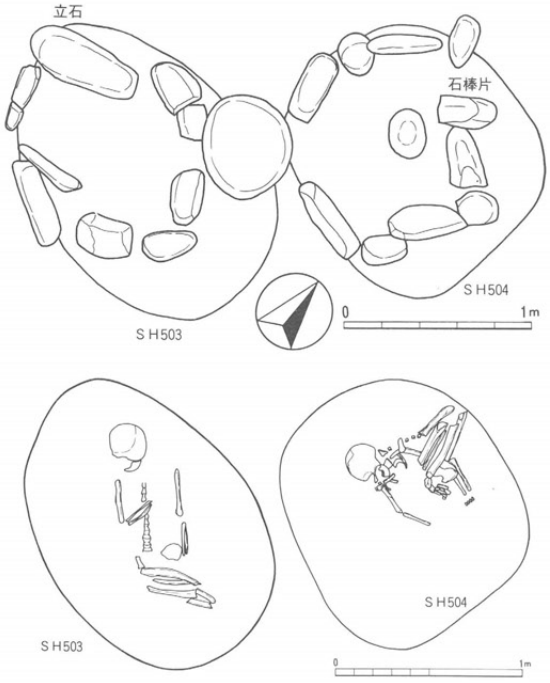
**柄鏡形敷石住居址**　確認された住居址は26軒あるが，確実に柄鏡形を呈する敷石住居址は14軒である。他の遺構との重複によって破壊されたものを含めると，さらにその数は増える可能性が高い。規模は，居住区にあたる主体部の径が４ｍ～５ｍ内外のものと８ｍを超えるものとがあり，一般に後期中葉に近づくにつれ大きくなる傾向がみられる。主軸は数例を除き南方から西方を指す。床面敷石の状態は全体に不良で，稀に鉄平石や軟質砂岩の板状石を敷設しているものもあるが，多くは主体部の外周に軟砂岩・花崗岩の円礫を並べているだけにとどまる。外周を巡る円礫は，竪穴の壁直下にみられるものや壁外を礫堤状に積み重ねられたものがあり一様ではない。いずれも柱穴は竪穴内に壁に沿って設けられている。一方，柄部分では，円礫の面を揃えて長方形に整然と敷設されている。炉は主体部のほぼ中央に位置する。板石あるいは円礫によって方形に切られた炉内には，さらに鉢形土器の胴部下位が埋設されているものもある。

**配石墓**　総数で約480基にのぼる土壙は，ほとんどが他遺構と重複しており完存するものは少ない。第９図は比較的残存状態の良い配石墓である。土壙上部に花崗岩・硬砂岩・安山岩の転石を用いて円環状に配している。同図左のSH503は人骨の頭部上に立石を伴い，右のSH504は円環状の配石中央に丸石を据えてある。配石の形態には，円環状・楕円状・花弁状等があり，立石や丸石のあり方を加えると数種の分別ができる。SH504は配石に石棒片が再利用されているが，他にも石皿片や磨石が使われている。土壙の平面プランは円形あるいは楕円形を呈し，極端に大きな土壙を除き，おおむね長径150cm内外，短径100cm内外にまとまる。深さは約40cm～80cm程度で，遺体の膝を立てて埋葬した場合でも膝が地表に露出することはない。土壙底部にも配石をもつ例は多く，SH503は土壙壁際に角柱状の礫を巡らせている。板状石を組んだ石棺状の配石墓もわずかながら確認された。人骨がほぼ完存していた土壙が55基あり，骨片等が出土した土壙を含めると約180基を越える。骨には多量の水分が含まれているため焼豆腐状となり，きわめて脆弱である。取り上げに際しては，骨の露出を極力ひかえ土をつけたまま発泡ウレタンで保護した。遺体の埋葬姿勢は，SH503にみられる仰臥屈葬が最も多い。他にも側臥屈葬や稀にSH504のような坐位屈葬もみられる。１例のみであるが伸展葬や合葬人骨も出土している。頭位は，東方を向く例が少ないほかは，南北西方いずれも存在する。土壙の同時性が十分に把握されていない段階では推測の域を脱し得ないが，頭位方向が共通する土壙が一定のまとまりをもつ傾向をみせているため，土壙群を抽出する際のポイントとなる可能性がある。遺体と遺物との関係でみると，SH503は抱石葬であり，他に５例甕被葬も存在する。副葬品とし

て，剝片，小形石器，石棒，磨石，ミニチュア土器が伴い，貝輪や硬玉製垂飾による装飾を施した遺体も出土した。とり上げられた人骨については，独協医科大学の馬場悠男講師に形質人類学的な面からの分析を，東京大学総合研究資料館の赤沢威助教授に生化学的な面からの分析を依頼することとなった。これによって性別，年齢，体格，抜歯の様子などのほか，食物や栄養状態の解明が期待され，考古学的分析と総合することによって，縄文時代後期の社会組織に迫ることも可能となるだろう。

今回の調査では，地下７ｍに埋没する縄文集落を確認したという点において，これからの該期遺跡に係る調査研究に多大な影響を与えた。しかも，本遺跡は，人骨を伴う多量の土壙が検出されたことにより，上記のように，考古学のみならず形質人類学や生態環境生態学を加えた学際的な研究をもって内陸部における縄文時代の社会構造に迫りうる可能性もを秘めている。調査は次年度へ継続されるが，集落域の広がりや遺構間の関連性等，着目すべき点をさらに整理し，これを補足していきたい。

（平林　彰）




第９図　北村遺跡配石検出状況と人骨出土状況

第10図　埋葬人骨出土状態

## 北村遺跡付近の地形と地質

中央自動車道長野線は豊科インター北方で松本盆地を離れ，盆地東縁の山間地へと進む。その入口部に当るのが，犀川右岸の段丘に展開する北村遺跡である。縄文時代中期末～後期の敷石住居や多数の人骨を保存した堆積物の状況，段丘面の堆積過程など新たな知見が得られたので，概要を以下に報告する。

### I　地形

この地域は，松本市北方の明科町光を中心に豊科町の一部を含め長峰山・光城山におよび，南北方向に走る山麓線を境にして，東側の長峰山地と，西側の松本盆地東縁とに分かれる。山地は標高900mほどの平坦な山嶺をなし，そこから急な断層崖で盆地に落ちる。山麓に沿って狭長な光段丘・明科段丘が伸びる。段丘にはいくつもの小規模な扇状地が小高く形成され，ＪＲ篠ノ井線・国道19号線が並走する。また，西側は段丘崖を通して犀川の氾濫原が開け，水田地帯や湧水地帯を形成している。氾濫原は松本盆地の最低地に当り標高530m内外，河流は直線的で，古くから洪水氾濫に悩まされ，耕地を共有する地割慣行が行われていた。

### II　地質

この地域の基盤岩はフォッサ・マグナに分布する。中部中新統の別所累層・青木累層，一部に鮮新統の大峰累層がみられる。段丘は基盤岩類を不整合に河床礫層・沖積錐が覆っている。

**別所累層**：長峰山地西斜面一帯に分布する。岩相は黒色緻密な泥岩で，表面は酸化鉄に汚染されるのが目立つ。この地層は剥離性に富み，細かい節理が発達して小塊片にくずれ易い特徴をみる。泥を主とした地層で，静穏な海域（海深200m内外）での堆積環境を示す。

**青木累層**：岩相は下部から礫岩・砂岩・砂質泥岩互層などで，奥沢中流域以東の長峰山地に分布する。この地層は浅い海での堆積物で，漣痕や乱堆積がみられ堆積時の激しい基盤運動を物語る。一般的に砂質泥岩互層部は軟弱で風化し易く，長雨期などには地すべりが頻発し，谷は濁流となって多量の泥土を流出している。

**大峰累層**：中山断層以西の松本盆地との山地および盆地の一部に分布する。頻海デルタ相またはデルタ相の粗粒堆積物および石英安山岩質凝灰岩などからなる。最近，光段丘端など盆地底への伸びが発見されたが，露出不良で明確さを欠く。中新統とは断層で接する。

**段丘堆積物**：氾濫原からの比高20mほどの基盤岩類を不整合に覆って，ほぼ水平な広がりで厚さ２m内外の河床礫層が分布し，段丘の基底をなす。上位は後背山地から運ばれた泥質物および泥岩岩屑などで構成される。最上位は山地斜面からの泥岩岩屑による扇状地（沖積錐）が小高く起伏を増し，現生活舞台となっている。

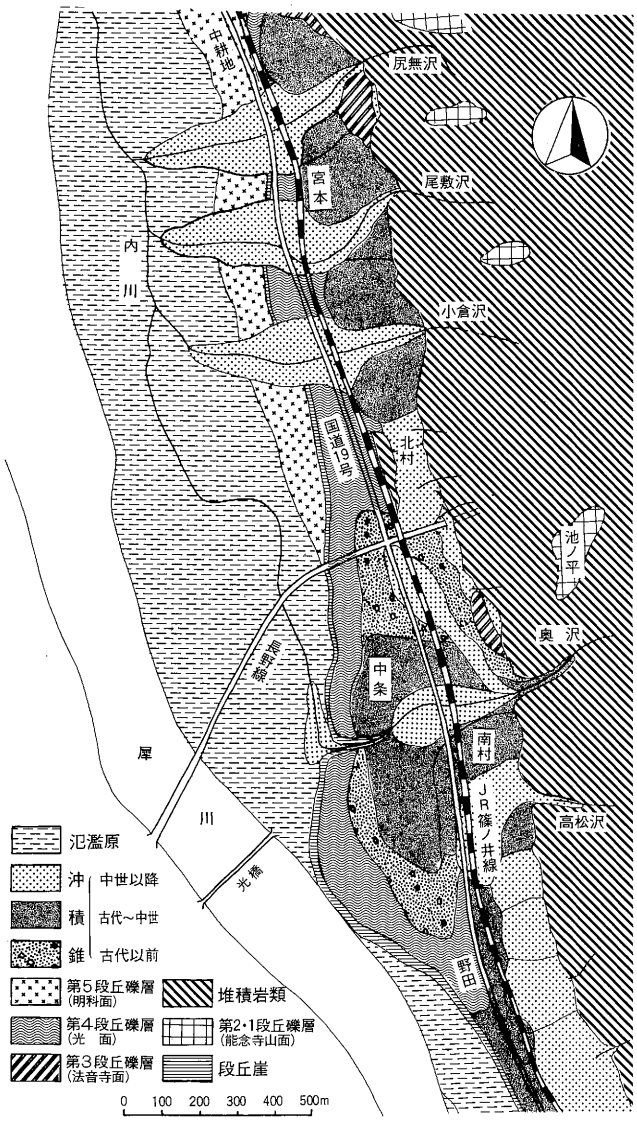
### III　段丘の形成期と堆積過程

(1)　段丘礫層

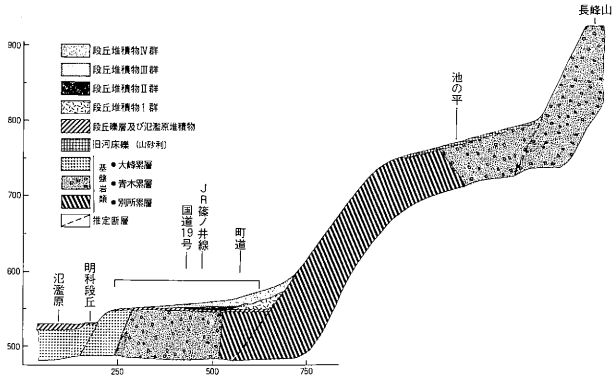
犀川の河床礫と同様な礫種構成で，径20cm以下の新鮮な円礫からなり，粗粒砂が充填している。従来この段丘は，洪積段丘と考えられていたが，

①　段丘礫層はロームの被覆を受けていない。

②　中央高地の隆起量は＋３mm／年であるが，この地域は盆地との昇降運動(犀川は100年間約100




第11図　明科町光付近の地形




第12図　明科町北村遺跡付近の層序断面図

cm下刻）の影響を考慮して隆起量を推測すると，約5000年の時間的経過を測る。

③　遺跡発掘を通して，縄文時代中期中葉以前の遺物・遺構が見当らない。等々の事象から段丘の形成期は，縄文時代前期と推測され，この期以降に離水し段丘面として安定したものと考える。

(2)　段丘堆積物Ⅰ群

この堆積物群はマスムブーメント堆積物である。背後の山地には非常に小さい急勾配な小沢が認められるだけで，谷頭部に古い崩壊地形がみられることから，この谷頭部の崩壊に伴う崩積土が土石流となって押し出したものと考える。Ⅱ群下部層とは指交関係にあり，数次の崩落による覆瓦状の堆積環境を示す。堆積期は段丘が安定した縄文時代中期以降が推定される。

(3)　段丘堆積物Ⅱ群

段丘礫層を直接覆うオリーブ褐色細粒砂層，泥岩細角礫を含む褐色粘性土，局部的に再食礫を含む灰オリーブ色粗粒砂層を挟み，上位は暗褐色泥岩細角礫土の層相を示す。この堆積物群は奥沢扇状地の初期的堆積物として，段丘礫層の凹地域を埋積した後，出水期にⅠ群堆積物を取り巻く状態で細角礫土が一様に供給されたものと判断される。堆積期は細角礫土層中に，縄文時代後期前葉の遺構・遺物が集中して出土し，土壌の腐植化も進んでいることから，縄文時代中期末までに堆積は終了したものと考える。

(4)　段丘堆積物Ⅲ群

下位のⅡ群とは不整合に接し，一般的に200cmほどの層厚である。黄褐色粘性土と暗褐色粘性土をセットとした4回の時

間空隙をもつ。背後の青木累層起原の砂岩風化礫が黄褐色斑紋を示し，山麓近くでは崖錐性の細角礫層を挟む。また，幾筋もの再食礫や岩屑を溢流した流路跡がみられ，母材の共通性から奥沢扇状地堆積物と判断される。上位層は奈良期から平安期の遺構遺物が分布し，下位層にはまれに弥生期遺物の挟在も認められる。従って，1000年余の期間を要し，扇状地の成長に従い静穏な堆積環境の中に成層したものと考える。

(5) 段丘堆積物IV群

背後の急勾配な小沢の運んだ泥岩細角礫土である。山麓沿いにIII群を覆い小高い小扇状地または崖錐をつくる。一部で先行の奥沢が運ぶ岩屑類と指交関係を示す。一般的に出水期の堆積が顕著で天井川の性質をもつ。堆積期は中世以降と考える。

## IV 縄文時代遺構に用いられた巨礫

1000個を越える巨礫が縄文期住居敷石部・墓壙集石部などに累々と用いられている。簡単には動かし得ない巨礫揃いで，最大は130cm×80cm×25cmの花崗岩塊をはじめ，一般的には50cm×35cm×30cm内外の古生層起原の亜円礫や第三系の砂岩塊である。これらの巨礫は犀川には存在しないことから，供給源を背後山地の山砂利と考える。即ち，山砂利とは，更新世中期以降，松本盆地の一部に断層活動があり相対的に東縁山地が沈降したとき，北アルプスが現在より東へ張出しており，急勾配の河川によって出水時に直接運ばれ堆積したものである。この地域では山地の開析が進んでおり，一部に成層状態がみられるが一般的には転石の状態である。転石は径2mに及ぶ花崗岩礫もみられ，奥沢には現在も転落した山砂利の巨礫が分布する。従って，遺跡の巨礫類は，山地の開析によって奥沢や小倉沢に転落していた山砂利・砂岩塊を，何等かの手立てを構じて搬入し，利用したものと考える。

第2表　遺跡付近の水質

| 採水地 | 水温(℃) | 地上より水面までの深さ(m) | 水深(m) | PH | 硅酸(mg/l) | 燐酸(mg/l) | 塩素(mg/l) | 硫酸(mg/l) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 北村遺跡発掘地やや北方 | 15.0 | 0.6 | 1.6 | 7.3 | 6.1 | 0.03 | 4.74 | 11.3 |
| 北村遺跡南方 | 16.2 | 1.7 | 3.0 | 7.2 | 6.7 | 0.04 | 32.57 | 28.5 |
| 北村遺跡発掘地西方段丘端 | 17.0 | 2.0 | 4.0 | 6.8 | 6.1 | 0.15 | 18.57 | 12.8 |
| 段丘崖下氾濫原の湧水 | 16.0 | | | 6.3 | 4.3 | 0.02 | 4.44 | 11.6 |

(東筑摩郡・松本市誌自然編より作成)

第3表　北村遺跡北方・小倉沢における別所累層からの湧出水

| 水温(℃) | PH | 蒸発残渣量 | 過マンガン酸カリ消費量 | イオン | | | | | | | | 硝酸 | 有離炭酸 | 硫化水素 | 亜硝酸 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | ナトリウム | カリウム | カルシウム | マグネシウム | 鉄 | 塩素 | 硫酸 | ヒドロ炭酸 | | | | |
| 7.0 | 7.6 | 826.0 | 3.4 | 40.4 | — | 140.2 | 41.9 | 0.62 | 4.3 | 410.5 | — | 22.2 | — | — | — |

## V　人骨を保存した立地

縄文後期人の完全体骨格を保存している地域は，段丘堆積物II群の範囲である。細粒砂層・均質な細角礫土層を掘り込んだ配石墓・土壙墓に埋葬姿勢を保った人骨の保存をみる。埋葬土の上位は５ｍ～７ｍに及ぶIII群IV群の緻密な堆積物に覆われ，地下深所に埋もれる。地下水は比較的豊かで，付近の井戸水位によると地表下２ｍ以内である。水質はPH7.2～7.3の微アルカリ性で，山地での湧出水は7.6とアルカリ度を増している。

骨が堅いのは70％ほどのカルシウム塩類を含み，ニカワ質が骨に弾力をもたせ丈夫にしている。土中で骨が軟化するのはカルシウム塩類が溶け，脆くなるのはニカワ質の成分が溶けたり腐ったりしてなくなるからと考えられる。出土した人骨は形態をよくのこしているが非常に脆い。骨膜および骨質部が剝がれて骨ずいを残す状態になることが多い。また，骨格周辺には，白濁粘土化した部分がみられ，軽度の臭気を放つ。

埋没していた人骨は，カルシウム塩類・ニカワ質成分の相当な溶脱はみられるが，微アルカリ性の地下水を豊かに含んだ厚い緻密な土中に埋もれ，たまたま真空パックされた状態の環境下に置かれたことが，長期間良好な保存状況をもたらしたものと考える。

（関　全寿）

## (3) 野口遺跡

所　在　地：東筑摩郡麻績村麻字入田1053ほか

調査期間：昭和62年7月8日～同年10月13日

調査面積：2,087㎡

立　　地：鍋山支脈の麓屑堆積物で形成された急傾斜の扇状地

時代と時期：縄文時代後期，平安時代，中・近世

遺跡の特徴：平安時代の集落・墓域

主な検出遺構

| 遺構＼時期 | 竪穴住居址 | 土壙 | 火葬墓 | その他 |
|---|---|---|---|---|
| 平安 | 2 | 1 | 1 | 炭焼窯？1 |

主な出土遺物

土器・陶磁器：縄文土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・内耳土器・中・近世陶磁器

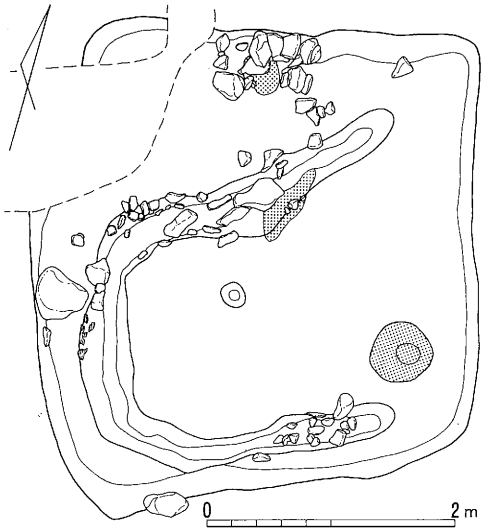
石器：石鏃・スクレイパー・磨石　土製品：羽口

**はじめに**　本遺跡は，野口集落南方にある鍋山の山麓に位置する北向きの急傾斜地にある。遺跡の中央に尾根が延びて調査区を分断しているため，東地区，西地区に分れる。調査区中央付近の標高は650m前後である。遺跡の主体は現在の集落付近と推定されるが，今回の調査区周辺は遺跡範囲が不明瞭であった。このため，本調査に先立って3月に県教委による試掘確認調査が西地区で行われ，遺構を確認した。西地区，東地区とも中央に川があり，西地区の左岸は，この確認調査により，遺構・遺物がまったく認められなかったため，調査対象から除外した。ただし，字「泰殿屋敷」地点は，試掘確認を行うこととした。また，東・西地区とも畑地部分は地山まで30cm前後ときわめて浅いため，人力で掘り下げ，尾根寄りの水田部分のみ重機を用いた。以下に，平安時代を中心に，時期を追って調査の結果を概観してみる。

**縄文時代**　きわめて少量の遺物が出土したにすぎない。西地区では称名寺式土器数片と石鏃，磨石，東地区では石鏃，スクレイパーが出土した。

**平安時代**　上表のとおりの遺構が検出された。炭焼窯らしい遺構が東地区にあるほかは,すべて西地区である。

1号住居址は遺存状態が悪く北半部は不明である。東西約4mを測り，南壁の東に偏った位置にカマドをもつ。カマドの西側には楕円形のピットがある。遺物はこの付近に集中し，土師器，黒色土器と少量の灰釉陶器があり，甕類が多い。灰釉陶器は虎渓山1号窯式である。2号住居址は1号住居址の50cmほど北になる。1辺4m弱，深さ約30cmの方形で，北壁中央にカマドをもつ。床面，壁外とも柱穴は検出できなかった。溝が北東隅からカマド前を通り，西・南壁にめぐっている。この溝は，平均して幅は30cm前後，深さは15cm前後で，カマド前の部分が深い。この部分には石蓋と思われる平石1枚が残り，溝内が焼け，覆土は炭化物が特に多かった。また，西壁前には炭化した木材の残欠らしいものが認められた。床面は北東隅が低く，南西隅がやや高い。遺物はカマドの東側に集中し，1号住居址と同じ内容であるが，杯・椀類が多く甕類は少量である。灰釉陶器は大原2号窯式である。この住居址の溝は，専門家の教示によりオンドル様の床下暖房施設と判明し，竪穴住居址に伴う例としては全国初の検出という。




第13図　野口遺跡のオンドル様施設をもつ竪穴住居址

この使用法には，溝全体に石蓋をかぶせ，カマドの前で焚火をして温風を送り込むか，取りはずし可能の板蓋を用いておき火を入れる，などの方法が推定される。

土壙は径約１m，深さ15cm前後の不整円形である。覆土中には多量の炭化物と鉄滓が含まれ，土師器の小破片と羽口の破片が出土した。この土壙自体が鍛冶址とは考えられず，製鉄に伴う廃棄物を埋めたものであろう。

火葬墓は径40cm前後，深さ約20cmの不整円形で，中からは撹乱された状態で，黒色土器杯，須恵器長頸瓶，同壺の下半部各１点と，少量の焼骨，炭化物が出土した。これらを復元してみると，須恵器の壺を外容器として蔵骨器の長頸瓶を入れ，黒色土器の杯を蓋として埋納したものと考えられる。

炭焼窯と思われるものは，長さ約4.8mの溝状の遺構である。後世の暗渠と重機によって両側を削られ，現存幅は0.9m，深さは30cm前後である。長軸方向は等高線と直交し，底面は約８°の傾斜をもつ。覆土の大部分は焼土を混えない炭化物層で，炭化した木材を含む。土師器破片が少量出土した。全体の構造は知り得ないが，炭焼窯の可能性が高い。

以上の遺構のうち，２軒の住居址は10世紀頃に営まれ，さほど時間的なへだたりはない。火葬墓はこれに先行すると思われ，風水思想に基づく占地を示すものであろうか。また，検討の余地は大きいが，製鉄址と製炭址との関連性を推定することもできるかもしれない。

**中・近世**　この時期の遺構はなく，陶磁器片が出土したにとどまる。中世に属すものには，珠洲系擂鉢，明青磁，内耳土器があり，近世に属すものには，天目茶碗，鉄釉・御深井釉などの陶器がある。

**まとめと今後の課題**　本遺跡周辺はもとも全面が桑畑であり，水田に転化されたのは昭和10年代，現在のような野菜中心の畑地に変ったのは戦後のことで，何度か抜根や深耕が行われてきたという。このため，当初，遺跡の保存状態はきわめて悪いことが予想されたが，今回山間部の平安時代集落の一部を調査できたことは貴重な成果といえる。検出された遺構は少数とはいえ，類例の少ないものがいくつか見られる。今後，水田耕作に不適な古代山村の生活のありさまを明らかにするとともに，２号住居址のオンドル様施設の構造を復元し，それが麻績の地に伝わった背景を考えていきたい。また，地元の伝承では「泰殿屋敷」は青柳城と関連する人物の屋敷といわれており，文献も参照しながら出土した陶磁器について考察していく必要がある。

（綿田弘実）

## (4) 古司遺跡

所　在　地：東筑摩郡麻績村麻字さいくわん4472－1ほか
調 査 期 間：昭和62年4月20日～同年5月11日
調 査 面 積：14,500㎡
遺跡の立地：麻績川左岸にあたる北向きの平坦な段丘面
時代と時期：弥生時代，中世
検出遺構・遺物：遺構はなし，遺物は微量（遺物散布地）

本遺跡は当初，弥生時代の集落遺跡であると予測されていた。北方眼前には麻績川が西流し，その対岸にはやはり弥生時代遺跡である立石遺跡が立地するという環境であったが，地下数10㎝も掘ると水が湧き出すという状況がみられ，集落の存在には若干の疑問ももたれた。従って調査は，東西約220m，南北約60mの路線内に，東西方向のセンター杭を基準に10mおきのグリッドを設定し，さらにそのグリッドを中心に北，南方向へ，やはり10mおきに2×2mのグリッドを設定した確認調査から始めた。

結果的には70グリッド，280㎡の掘り下げを行なうことになり，いずれも1.5～2m近く掘り下げたものの，地下水の湧き出しが激しく，かつ層序は泥炭層の重層になっていることが確認され，遺構は皆無，遺物も流れ込み的な微量が採集できたにとどまった。この確認調査の成果とともに，地質学的な検討を加えると，この地は，麻績扇状地の発達に伴って生じた閉塞部に，永井川，安坂川による流水や浮流物質が滞ってできた湿地帯で，アシやヨシが生い茂る湿原帯であったという所見も得られた。ようやく現地形として安定し始めるのは中世以降であろうということであり，考古学的，地質学的にこの地が集落地帯である可能性は薄らいだのである。

以上の結果から，中央道本線内に遺構の存在はなく，遺物散布地として，その中心は本調査区域より南方，山麓沿いに求めることができよう。

（三上徹也）

## (5) 子尾入遺跡

所　在　地：東筑摩郡麻績村麻字子尾入5442ほか
調 査 期 間：昭和62年４月23日～同年５月27日
調 査 面 積：1,220㎡
立　　地：三峯山南麓の南に傾斜する狭い谷
時代と時期：縄文時代，中・近世
検 出 遺 構：なし
出 土 遺 物：中・近世土器，陶器，打製石斧，剥片

本調査区は東西100m足らずの狭い谷地形で，標高は690m前後である。三方に山が迫り，眺望，日照ともよくない。現状はカヤや雑木が繁茂する荒地となっているが，かつて畑，水田が営まれていたといい，地形に名残りをとどめている。

遺跡の内容が不詳のうえ，立地条件から推測して遺構・遺物が多出するとは予想できないため，まず試掘確認を行うこととした。人力では掘り下げが無理なため重機によるトレンチ法をとり，水道の仮設や通勤の難から作業員の協力は得ず，調査研究員のみで作業を行った。トレンチは幅２mとし，調査区の中央を通る南北約200mのトレンチ１本と，これに直交する東西50～80mのトレンチを，約25m間隔で６本設定した。この結果，掘り下げたトレンチは総延長610mとなった。土層の観察により，本調査区は両側の山から崩落した礫層を基盤とし，これが土壌化した砂土に覆われており，河道の定まらない幾筋もの沢による土砂の流出も著しいことが判明した。遺構は検出されず，上記の遺物がごく少量出土したにすぎない。このため面的な発掘は不要と判断され，調査を終了した。

以上のことから，本調査区はもともと人間の居住地としては不適であり，少量の遺物は周辺から流出・移動してきた可能性が高い。たとえ小規模な生活址があったにせよ，自然営力によってほとんど痕跡をとどめないと思われる。また遺跡の中心は，かつて遺物が出土したという北側の平坦地あたりと推定される。

（綿田弘実）

〈関越自動車道上越線〉

## 遺跡周辺の地形と地質

本地域の地質を特徴づけるものは浅間山である。浅間山は基盤の浸食期を経て5～10万年前から現在の活動が始まったとされ（荒牧，1968；河内・荒牧，1979），膨大な噴出物を山麓に供給している。関越自動車道上越線は東半の基盤地域（下部更新統，170～70万年前）から西半の浅間山軽石流（約11,000年前）堆積地域を通過し，その境界は丸山古墳群（第14図）付近である。基盤地域は兜岩累層，志賀溶結凝灰岩・平尾富士溶岩（河内・河内1963）などから成り，現在は浸食を受けて落差の著しい尾根と谷が形成されている。中でも西祢ぶた遺跡～西林遺跡間は低い定高性を示すやせ尾根と岩塊流による埋積の結果と考えられる浅い谷部が東西に規則的に繰り返し，各遺跡はこの谷部に立地する。軽石流堆積地域は約30m厚の第1軽石流（$P_1$）とその二次堆積物（$P_3$）から成り，典型的な「田切り」地形を形成する。湯川に沿っては，河床低下に伴うと思われる段丘が発達し，これらの基底は$P_3$から構成される。栗毛坂遺跡東部は湯川による段丘上に立地する。したがって，各地点の表層地質は基盤地域が風化砕屑物，$P_3$地域が泥流や崩落物，$P_1$地域が腐植層などを主体として構成される。

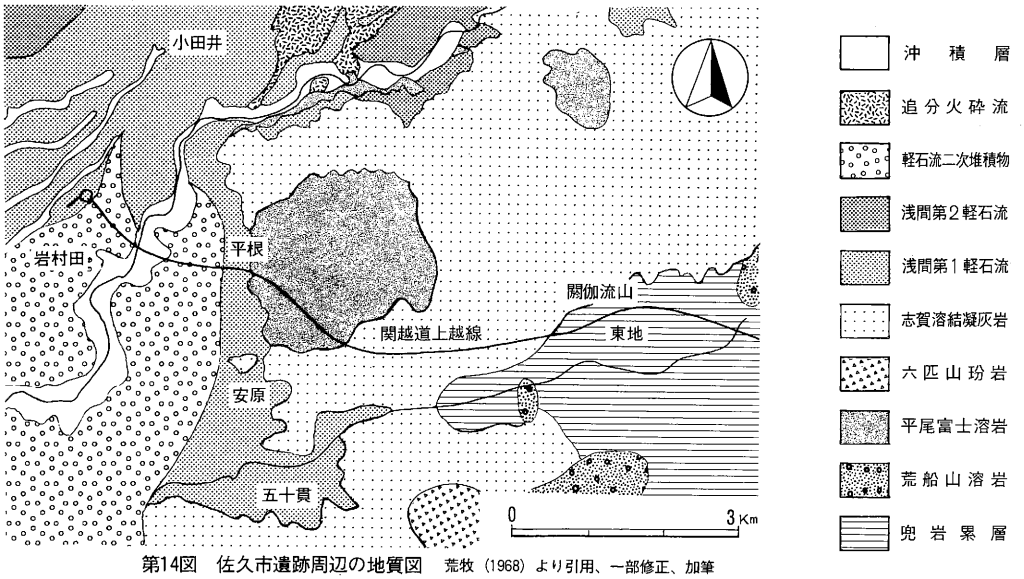
次に本年度調査した遺跡に見られる土層について，立地環境から岩村田地区・東地地区に大きく分けて概略を報告する。なお，丸山，西大久保・腰巻各遺跡についてはここでは触れない。

**岩村田地区**　枇杷坂，西赤座，栗毛坂の各遺跡を含む。湯川右岸の低位段丘及び高位段丘上に立地する栗毛坂遺跡A地区・B地区東南端を除いて他は，田切り地形の発達した浅間山軽石流堆積の台地上に立地し，全体は南に向かって傾斜を見せている。また，C地区のある一帯は過去において水田開発が行われており，土層堆積の環境は悪い。

層序は堆積の厚い栗毛坂B地区中央部の土層を基本とした。IIA層は軽石流二次堆積物で，腐植化した部分をわけた（II$A_1$）。I層は5部層から成る泥流性堆積物で，全体に軽石を多く含む。とくにB地区中央部の低まった一帯には砂礫層がみられ，氾濫の一支流があったことを示している。また，全体に南東方向に礫・砂・細粒砂の変化が観察できた。これに比べ，C地区付近一帯はI層の堆積が薄く，IA層（耕作土）の他にIB層・若干IC層がみられる程度である。このことは，一帯が人為的影響のみならず微高地となっていたことにも起因しよう。一方，湯川の低位段丘にある栗毛坂遺跡A地区は，全体に含水量の高い湿潤な土壌となっている。IIA層より上層は湯川による砂の堆積物や，段丘崖上部より崩落した堆積物が，段丘崖下端に厚く堆積しているのを観察できた。なお，ID層で中世の遺構，I$E_2$層で平安時代の遺構，II$A_1$層で古墳時代の遺構の各々の掘り込み面が確認されている。

**東地地区**　西祢ぶた，東祢ぶた，城の口，干草場，西林の各遺跡を含む。各遺跡は閼伽流山から八風山に連なる山嶺から南にのびる尾根の間に立地している。層序は，IV層下部を鍵層にして組みたてた。しかしながら，現段階では若干の問題点も残されており検討中である。

I層からIII層までは風化した石英安山岩片・スコリア粒を含む砂壌土で，二次堆積によるものであり一層は多くが耕作土となっている。IV層は淘汰の悪い小礫大のスコリアがブロック

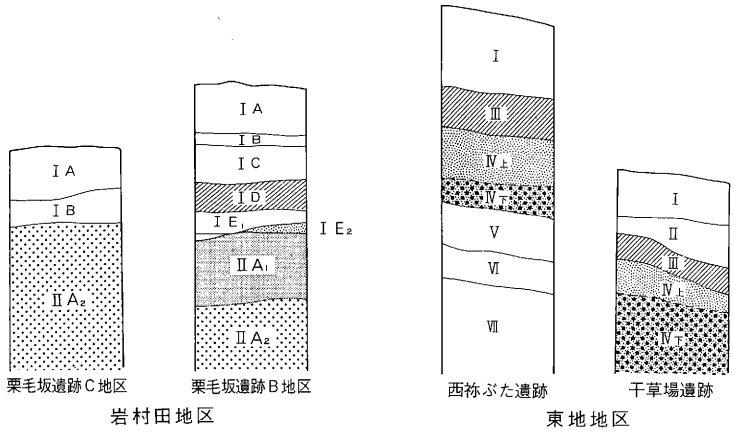



第14図　佐久市遺跡周辺の地質図　荒牧（1968）より引用、一部修正、加筆

状，帯状になっている下部と，それを含みやや砂壌的な腐植層と思われる上部とに分かれる。とくにⅣ層下部は地域内東部で帯状に厚く，西部でブロック状に観察される。Ⅴ層以下は風化による粘土化の著しいものである。なお，西祢ぶた遺跡ではⅢ層上面に平安時代の遺構の掘り込み面が確認されている。

（小口　徹・岡村秀雄）

文献：荒牧重雄「浅間火山の地質」『地団研専報14』1968年
河内晋平・河内洋佑「霧が峰 荒船地区における鮮新世火山活動Ⅰ」『地球科学64』1963年
河内晋平・荒牧重雄『小諸地域の地質，五万分の1図幅』1979年




第15図　土層模式図

## (1) 西林遺跡

所　在　地：佐久市大字香坂字裏林1054番地ほか
調 査 期 間：昭和62年９月１日～同年９月８日
調 査 面 積：2,400㎡
遺跡の立地：八風山々系南側の谷中斜面
時代と時期：縄文時代中期末～後期初頭，平安時代
遺跡の特徴：縄文時代及び平安時代の遺物散布地
　検出遺物
土器・陶器：縄文時代中期末～後期初頭土器・灰釉陶器
そ　の　他：黒曜石

南北約300m，東西約60mの狭小な谷地形に営まれた遺跡である。南面する緩斜面で，現状は畑地として利用されている。遺跡北端の谷頭部分が調査の対象となった。

調査対象区域での谷幅は30m前後を測るに過ぎない。谷中には沢が流れ，居住空間をさらに狭めている。事前踏査で得られた遺物が灰釉陶器片１片に限られたことからも，遺構群の展開を想定し得る状況ではなかった。したがって，試掘トレンチを入れることから調査を開始した。

調査区全体にいきわたるように計４本のトレンチを設定した。沢周辺はかつて幅広く落ち込んでいたようである。また，溶結凝灰岩が調査区全面に崩積している。礫を除けば，土層の堆積状況は比較的安定しているが，地下水位が高く各所で湧水を認める状態であった。住居を構えるには不適な地であったらしい。遺構は確認できず，遺物も縄文時代中期末～後期初頭の土器片２，黒曜石１の出土をみただけである。利用頻度の極めて乏しい地点と判断し，面的に拡げることなく調査を終了させた。

路線外の遺跡南端の谷尻部分では，縄文時代を中心とした遺物が多数採集されており，居住域の中心であったことを物語っている。調査区周辺はあまり利用されなかったことからみて，小範囲に展開した集落のようである。しかし，周辺には，同じく縄文時代や平安時代の遺物を包蔵する遺跡が隣接している。これら周辺諸遺跡と相互に関連して成立・展開したものと思われる。

（宇賀神誠司）

## (2) 千草場遺跡

所　在　地：佐久市大字香坂字千草場1659番地ほか

調 査 期 間：昭和62年９月７日～同年10月８日，同年11月17日～同年11月20日

調 査 面 積：1,700㎡

遺跡の立地：八風山々系南側の谷中斜面

時代と時期：縄文時代中期・後期，平安時代，中世，近世

遺跡の特徴：縄文時代遺物散布地，平安時代生活域，近世塚

主な検出遺構

| 遺構／時期 | 土　壙 | その他 |
|---|---|---|
| 平　安 | 1 | |
| 近　世 | | 塚　1 |

主な検出遺物

土器・陶磁器：縄文時代中期・後期土器・土師器，須恵器，内耳土器，中世・近世陶磁器

石　　器：打製石斧，石鏃

そ　の　他：寛永通宝，ガラス小玉

本遺跡の地形は，尾根に挟まれた緩傾斜の谷部と，その下方に開く平坦部からなる。谷部では，中央からやや西寄りの表土下に，帯状の礫群が幅約２m，長さ50mにわたって検出された。この性格については，これより枝状に分岐する列石の下に，２本の丸太材が検出されて，近代以降の暗渠排水の施設であることが判明した。暗渠に一部切られた平安時代の土壙は，径約4.5m×2.5mの楕円形をなし，検出面からの深さは約35cmである。覆土中には集石を伴い，人為的に破壊されたとみられる須恵器の甕片が多量に一括出土した。土壙の存在が本来単独か複数かは，平安時代に対比できる土層堆積が周辺では認められなかったため不明である。平坦部は土層確認の結果，地山が砂礫層で，急傾斜の谷地形に盛土を行って耕地としてあり，遺構は存在しなかった。

この調査区域の東方に離れて存在するマウンド状地形は，当初，遺構であるかどうか不明のまま調査に着手したが，結果的には人為的な塚であることが明らかとなった。塚は斜面を利用して構築しており，基底部で径約７m，高さ約２mの盛土をなし，表土直下は一辺約５mの方形状に列石をめぐらしている。中央部分の残存状態は良くないが，基壇状に２段の配石をなしその下部は，地山を掘り込んで方形に近い土壙を設けている。この土壙上面と底面からは，寛永通宝が14枚と透明のガラス小玉が１点出土した。

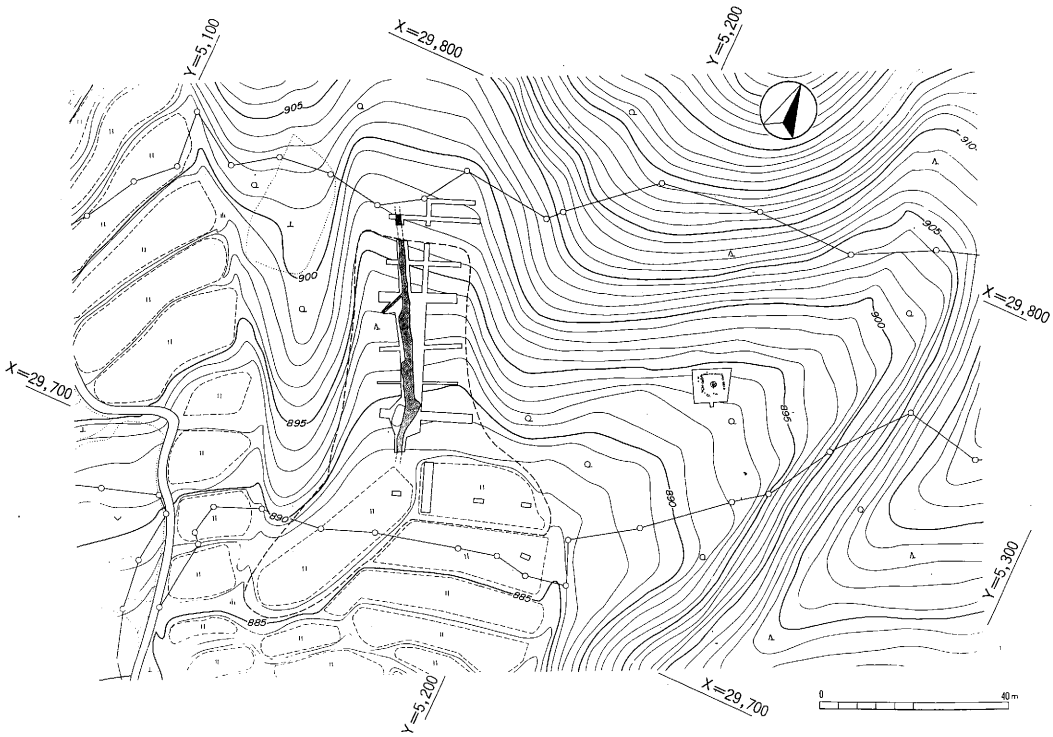
塚の構築過程は，土層の堆積と施設の状況から推定すると，まず，地山を整形し，土壙を掘って埋納物を入れ，埋め土と盛り土を連続して行ってから，周囲に列石を，中央に配石を基壇状に設けたものと考えられる。ただし，細部における構築手順は検討を要するところである。

塚の性格については，その形態と出土遺物から近世の墳墓の様相が強いが，人骨が検出されなかったため，判定はできない。この点については，土壙内埋土の化学分析の結果を待ちたい。

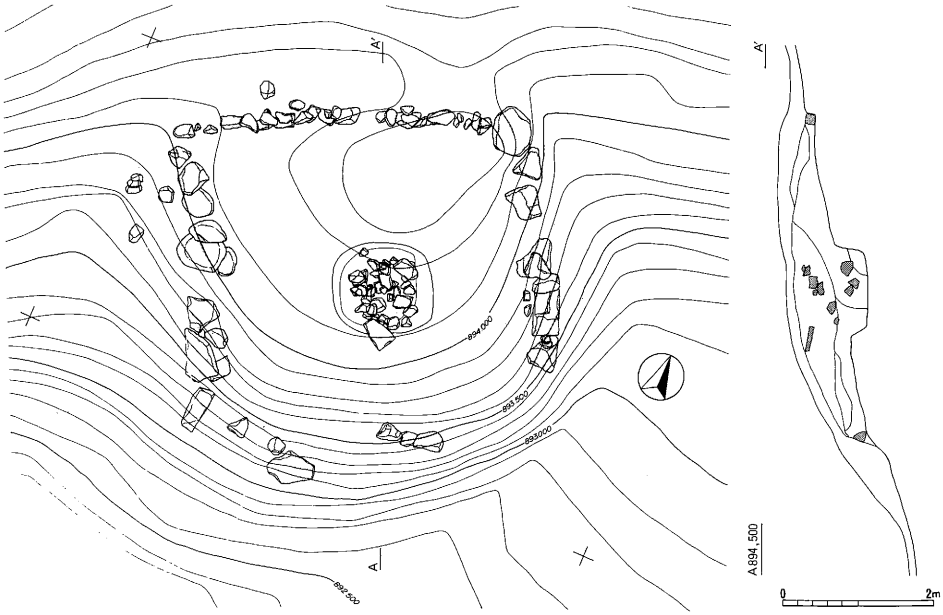
一方，地元では，「この塚の近くに上人さんが住んでいた岩屋がある」という話があり，周辺の現地調査を実施した結果，塚の北東路線外の山腹に，灯明皿に用いたとみられる近世陶器を伴った石室を確認することができた。さらに，この地には，修験の霊場として知られる閼伽流

山(さん)が存在することも加え，塚の性格究明については今後，多方面からのアプローチが必要となろう。

（臼田武正）




第16図　干草場遺跡全体図（1：1,600）




第17図　干草場遺跡近世塚（1：100）

## (3) 城の口遺跡

所　在　地：佐久市大字香坂字千草場1633番地ほか

調 査 期 間：昭和62年９月10日～同年10月５日

調 査 面 積：700m²

遺跡の立地：八風山々系の南向斜面及び尾根の縁辺部

時代と時期：縄文時代早期・中期・後期，平安時代，中世，近世

主な検出遺構

| 遺構／時期 | その他 |
|---|---|
| 近世以降 | 道路址１ |

主な出土遺物

土器・陶磁器：縄文時代早期・中期・後期土器，土師器，内耳土器，中・近世陶磁器

石　　器：打製石斧，石匙

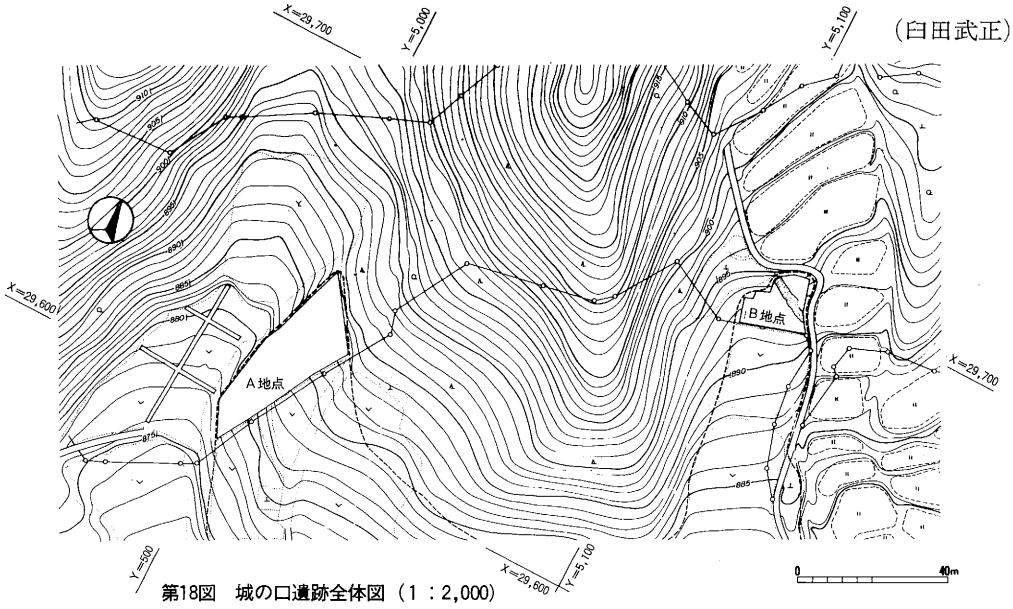
調査対象区域は遺跡の北端にあたり，尾根を挟んで東西の２地点に分かれる。このため調査は西側をＡ地点，東側をＢ地点として実施した。

Ａ地点は急斜面であり，全体に削平を受けていて，遺構は検出されなかった。縄文時代と中世の遺物が若干出土したにすぎない。

Ｂ地点は調査区域の北東部に，幅２～３ｍ，長さ約14ｍにわたって道路址が検出された。検出面が表土直下であり，堅緻な道路面に19世紀代の陶器片が入り込んでいることから推定すると，この道路は近世以降の比較的新しい時期まで使用されていたと考えられる。また，現在の農道との関連では，この箇所だけ大きく迂回しているため，耕地の拡大ないしは道路の変更によって廃止された旧道の一部とみることができる。出土遺物は中世の内耳土器片が多数を占めるが，道路址以外の遺構は存在しなかった。

以上の調査結果から，本遺跡のＡ・Ｂ地点は，主要の生活域とはならなかったと言える。

（臼田武正）




第18図　城の口遺跡全体図（１：2,000）

## (4) 東祢ぶた遺跡

所　在　地：佐久市大字香坂字東祢ぶた1790番地ほか
調査期間：昭和62年8月17日～同年10月5日
調査面積：7,400m²
遺跡の立地：八風山々系南側の谷中斜面
時代と時期：縄文時代早期・中期～後期，平安時代
遺跡の特徴：縄文時代及び平安時代の集落

主な検出遺構

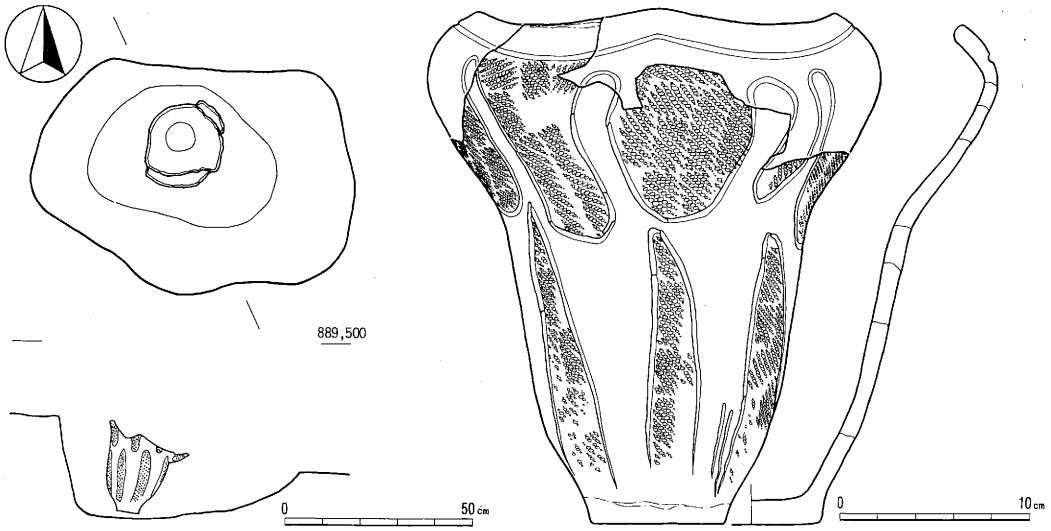
| 時期＼遺構 | 竪穴住居址 | 土壙 | その他 |
|---|---|---|---|
| 縄文 | 2 | 1 | 屋外単独埋甕 1<br>遺物集中区 3 |
| 平安 | 2 | | |
| 不明 | | 4 | |

主な検出遺物

土器・陶器：縄文時代早期後半・中～後期土器，土師器，須恵器，灰釉陶器
石　　器：打製石斧，磨石，凹石，石鏃，スクレイパー
石 製 品：浮き状石製品，砥石
そ の 他：銭貨

本遺跡は山嶺からの押し出しによって形成された狭小な谷中傾斜地上に占地しており，西方には痩尾根を挟んで西祢ぶた遺跡が位置する。今回調査対象となったのは，本遺跡の北端部分に相当し，標高は870～900mを示す。当初，水田として開墾され，原地形をとどめる部分が少なかったことから遺構残存の有無が心配された。調査は手剝ぎと併行して重機による表土除去から開始し，遺構精査へと進めた。その結果，調査区の北半に相当する平坦部より，住居址4軒をはじめとして上記したごとくの遺構，遺物を検出することができた。以下，調査過程で得られた所見をもとに，その概要について触れてみたい。

縄文時代の所産ととらえられるものとしては，住居址2軒・屋外単独埋甕1基・遺物集中区3か所などがある。時期的には早期後半と中期末～後期初頭とに大別される。早期後半に属するのは遺物集中区1か所のみであるが，数十片の貝殻条痕文系，鵜が島台式土器とともに打製石斧・黒曜石製スクレイパー，黒曜石剝片などが検出されている。住居址や該期に特徴的な陥し穴の存在等生活・生業の痕跡を明確に示しうるものはなかったものの，遺物の集中的な出土状態は何らかの営みがそこでなされたことをうかがわせるあり方を呈していた。早期後半期の遺物は佐久地方では未だ類例に乏しく，その出土状態とともに注目される。住居址をはじめとする他の諸遺構はすべて中期末～後期初頭に位置づけられる。2軒の住居址は調査区の北東端部に隣接して営まれており，出土土器からともに中期末の所産と判断される。そのうちの1軒は敷石住居址であり，耕作による撹乱が著しく全体の形状は不明であるが，大形の平石や鉄平石を用いて面的に敷きつめている。また，他の1軒についても壁際に平石を敷いており，埋甕炉・出入口部埋甕を伴っていた。屋外単独埋甕は85cm×60cmを測る不整形な掘り込み内に正位の状態で埋設されていた。出土土器は関東地方に主な分布域をもつ加曽利E式であり，その終末段階に位置づけられる。これらの他，先述したように遺物集中区2か所が検出されているが，土器・石器類の出土総数は1,200点余りを数える。この遺物集中区は屋外単独埋甕とともに調査




第19図　東祢ぶた遺跡屋外単独埋甕出土状態（1：20）同出土土器（1：4）

区の西半部に偏在して分布しており，先に示した住居址の分布とは占地を異にしていた点を指摘することができる。居住の場と非居住の場といった性格づけが許されるならば，本遺跡でのあり方が，中期末～後期初頭における集落構造の一端を表わしているととらえることも可能であろう。

平安時代は2軒の住居址が検出された。遺物の詳細な検討が済んでおらず時期を特定しえないが，灰釉陶器片が出土していることから該期の中でも新しい時期の所産と考えられる。遺構・遺物について本遺跡のみから特徴を摘出することはできないものの，平安期の山間集落という視点からすれば，栗毛坂遺跡など平坦地の集落と対比されて興味深い。また，隣接する西祢ぶた遺跡との関係についても注意しなければならない。

以上，調査の成果についてその概要を記した。そこでは本遺跡が縄文時代と平安時代の集落遺跡ととらえられるとともに，各時代，各時期によって様々な人的営みが展開されてきたことが理解された。細部については今後の整理にゆだねなければならないが，従来調査例の少なかった山間の遺跡を調査しえたことは，当地の歴史的復元を試みるための資料として貴重なものとなろう。

（百瀬忠幸）

## (5) 西祢ぶた遺跡

所　在　地：佐久市大字香坂字西祢ぶた1828番地ほか
調 査 期 間：昭和62年８月17日～同年10月13日
調 査 面 積：2,300㎡
遺跡の立地：八風山々系南側の谷中斜面
時代と時期：縄文時代早・中期，平安時代
遺跡の特徴：平安時代の集落

主な検出遺構

| 遺構／時期 | 竪穴住居址 | 掘立柱建物址 | 土壙 |
|---|---|---|---|
| 平安 | 6 | 1 | 1 |
| 不明 | | | 1 |

主な検出遺物

土器・陶磁器：縄文土器，土師器，須恵器，灰釉陶器，緑釉陶器，中世陶器，近世陶磁器
石　　器：石鏃，打製石斧，凹石
鉄　製　品：鉄鏃

調査の対象となった区域は，南北に長い西祢ぶた遺跡の北端部あたる。狭小な谷の奥部の緩斜面に位置し，調査区北端から南端の標高差は約15mを測る。東側尾根上には祢ぶた城跡があり，尾根を挟んだ東の谷には東祢ぶた遺跡がある。調査区南端の隣接地では，先に佐久埋蔵文化財調査センターによる発掘調査が行われ，平安時代の竪穴住居址１軒を確認している。そのため，本調査区内にも該期の遺構が広がりをみせているものと推測した。

調査は当初予定されていた範囲である西側尾根のやや陰になった部分から始めたが，平安時代の遺構を検出するとともに縄文時代の土器片が出土したため，東側尾根部分の調査も実施したが，谷の中央を流れる沢付近では崩落してきた溶結凝灰岩の巨礫が集中してみられ，遺構の存在は考えられず，東側尾根部でも同様に遺構・遺物ともに皆無であることが確認された。そのため，遺構の分布は調査区南半分の沢に画された西側一帯に限られていることが判明した。

検出された遺構のほとんどは竪穴住居址である。各竪穴住居址からは，平安時代中頃の土師器・須恵器・黒色土器に混って少量の灰釉陶器が出土している。短期間内に廃絶された集落の様相を示している。一方で，一部の竪穴住居址間には同時存在が困難と思われる程近接したところもあり，集落内での各竪穴住居址のより短い変遷が考えられる。また，竪穴住居址全体をみると，床面が明確でないこと，柱穴がないこと，遺物量が少ないことなどの斉一的な特徴が指摘できる。逆に，カマドの残存状況の良好なもの劣悪なものという明らかな相違も竪穴住居址相互に見られる。前者には第５号住居址のような，袖の石組，粘土の残りが良く，火床部内に平石が敷きつめられているものもある（第21図）。後者は火床部が検出できる程度であった。対称的なこれらのあり方も，本遺跡の特徴として指摘できよう。

その他，平安時代の遺構検出面では縄文時代中期末から後期初頭にかけての土器片が少量出土したが，帰属する遺構は確認されなかった。さらに同検出面の下層から縄文時代早期の押型文土器片が数点みられたため，一部同層での検出を行ったが，遺構・遺物ともに認められてな

第20図　西祢ぶた遺跡全体図（1：1,000）

第21図　西祢ぶた遺跡５号住居址カマド

い。両者ともに流れ込みと思われるが，周辺諸遺跡との関連を考えれば興味深いものがある。

本遺跡の特徴は該期に出現する山間部における単発的な集落の一典型である点にある。この点を踏まえて，今後，集落のあり方について周辺遺跡との関連，さらには社会的背景の検討を通して，本遺跡の意味を探っていきたい。

（岡村秀雄，河西克造）

## （6・7） 丸山古墳群・丸山II遺跡

所　在　地：佐久市大字上平尾字丸山2713番地ほか
調 査 期 間：昭和62年9月28日～同年11月30日
調 査 面 積：丸山古墳群2,200m²　丸山II遺跡3,000m²
遺跡の立地：平尾富士山麓から伸びる尾根の鞍部
時代と時期：縄文時代前期末～中期初頭・後期，弥生時代後期
遺跡の特徴：弥生時代後期の集落

主な検出遺構

| | |
|---|---|
| 弥　　生 | 竪穴住居址2 |
| 時期不明 | 土壙8 |

主な検出遺物

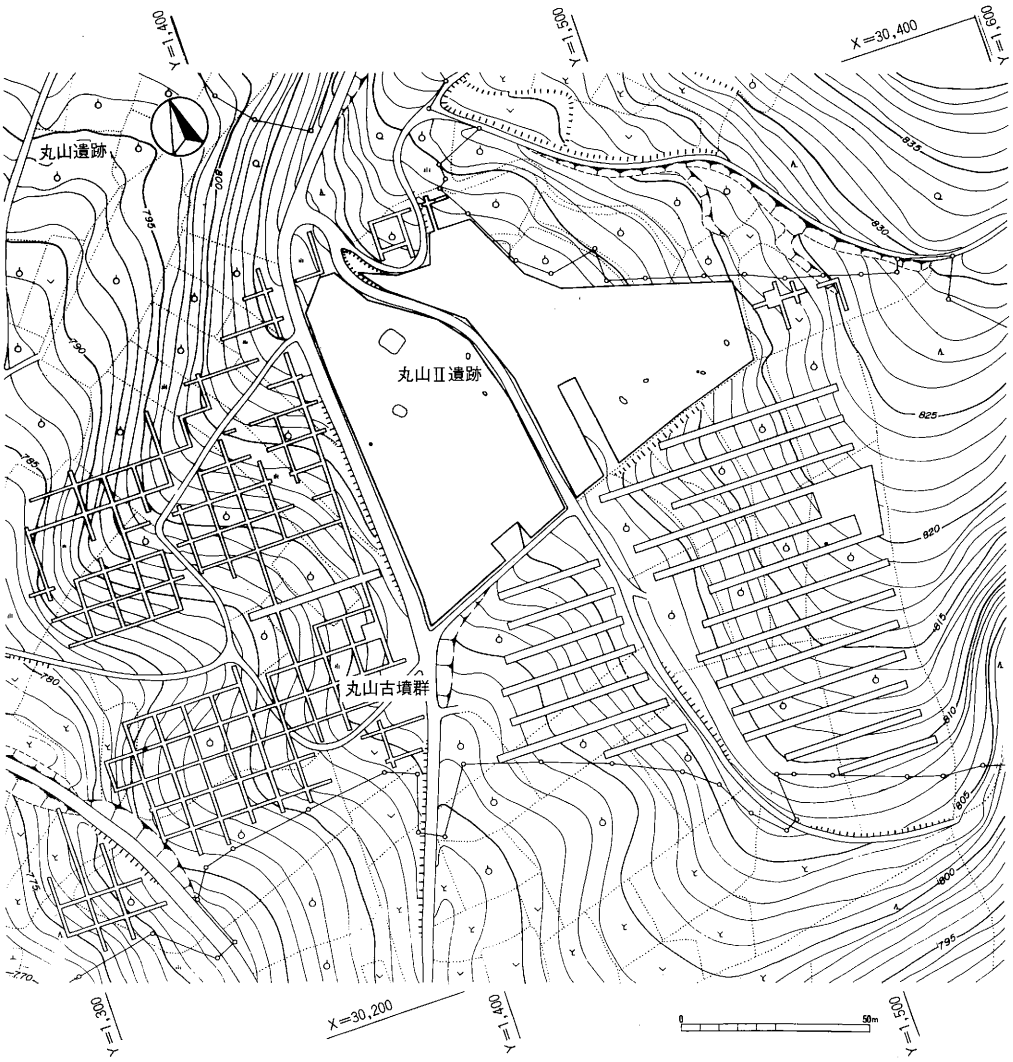
土　器：縄文時代前期末～中期初頭・後期土器
　　弥生時代後期土器
石　器：打製石斧・石鏃

丸山古墳群は，平尾富士から南西に伸びる尾根の鞍部に築かれている。西に広がる水田面との比高差は約80mを測り，佐久平を一望することができる。3基の円墳が現存するが，いずれも関越道建設予定地外に分布するものである。周辺は広く果樹園として利用されていることから，造成の際，墳丘を削り取ってしまった可能性があり，事実，路線外であるが古墳2基の破壊を聞きとりで確認している。古墳群としての周知範囲が予定地内にも伸びており，かつ遺物包蔵地の可能性もあることから試掘調査を実施した。また，調査の結果，弥生時代の集落址の存在が判明したため，これを丸山II遺跡とし，その範囲の本調査を行った。

**丸山古墳群**　8mグリットを設定し，それに沿うかたちで幅1～2mのトレンチを入れ確認を試みた。トレンチ間隔に多少の差こそあれ，調査対象区全体にくまなく設定したが古墳を確認するまでには至らなかった。かつて古墳が築かれていた可能性はなお残るものの，聞きとり調査でその情報が得られなかったこと，分布域の中心からそれていること，石室その他施設の破壊痕すら認めなかったこと，該期の遺物が皆無であったことなどから，それを肯定する材料は極めて乏しい。したがって丸山古墳群の調査については，本年度をもって終了とした。

**丸山II遺跡**　尾根の西側斜面中位に営まれたものである。南北両縁に小起伏がみられ谷地形状をなす。トレンチ掘削の段階で，遺物の出土をみたのは当地点のみであった。

弥生時代後期の竪穴住居址2軒，時期不明の土壙8基を検出している。他に縄文時代の土器及び石器を得たが，微量で，明確に包含層を形成するものでもない。2軒の竪穴住居址は，やや特異な在り方を示す。遺物出土状態では，1軒から高杯の杯部だけがほぼ完形で，もう1軒からは同一個体の甕片が散在して出土し，ともにそれを除く遺物を破片すら検出できなかった。構造面では，柱穴・炉を伴わず床も明瞭でなかった。一般的な住居とは使われ方が違っていたらしく，長期的に利用することもなかったようだ。集落として認定することに疑義さえ抱く。別な地で営まれた集落に付随した構築物としてとらえることも可能であろう。いずれにせよ，かつてない形態の集落であることに相違ない。弥生時代集落構造の一端を具現するものかもしれない。来年度には，尾根西側の谷中傾斜面に占地する丸山遺跡の調査を控えているが，関連




第22図　丸山古墳群・丸山Ⅱ遺跡全体図（1：2,000）

する遺構が存在することも考えられる。丸山遺跡の調査結果も踏まえて，今後深く追究していきたい。

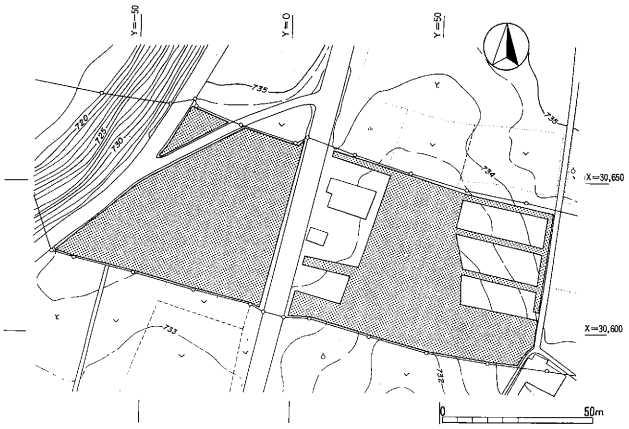
なお，先土器時代の遺跡確認を目的に，一部基盤層まで調査したが，遺構・遺物は検出されなかった。

（近藤尚義・宇賀神誠司）

## (8) 西大久保遺跡

所　在　地：佐久市大字上平尾字西大久保724－1番地ほか
調 査 期 間：昭和62年9月21日～同年10月8日，同年11月26日～同年12月9日
調 査 面 積：5,900m²
遺跡の立地：浅間山南麓の湯川左岸の台地
時代と時期：縄文時代後期，弥生時代，平安時代，中世
遺跡の特徴：遺物散布地
　主な検出遺物
土器・陶磁器：縄文時代後期土器，土師器，須恵器，中世陶器
石　　器：打製石斧，横刃型石器，磨石
そ　の　他：銭貨

本遺跡は，湯川左岸の平尾山西南麓に開けた，浅間山南麓末端部の台地上に立地している。標高725～735mほどで，湯川の低位面とは30mの比高をもつ段丘縁辺部にあたる。遺跡範囲は，この段丘縁辺部に沿って南北に伸びており，『佐久市遺跡詳細分布調査報告書』（1984佐久市教育委員会）によれば，弥生土器，土師器，須恵器，陶器，打製石斧等が表採され，縄文時代～中世の長期にわたる複合遺跡であることが報告されている。



第23図　西大久保遺跡全体図（1：2,500）

今回の調査対象区域は遺跡の北端に当る。宅地範囲500m²を残し調査を行った。調査区の微地形は，本遺跡東端にみられる浸食によって形成された。幅60m，深さ1.8mの谷状地形に向って，西側段丘縁辺よりなだらかな傾斜を示す。遺物包含層は，その谷部の低地に堆積する黒色土上層中にのみ確認され，段丘縁辺部の広い範囲においては耕作土直下がローム層となり，遺物の存在は認められなかった。

遺物包含層からは，縄文時代後期土器片，土師器片，打製石器，中世陶器片等が混在して少量出土したにとどまり，遺構は検出されなかった。

なお，本遺跡の東側，市道建設にともなう発掘調査において土壙1基が検出されている。
（『西大久保遺跡発掘調査報告書』1987　佐久市教育委員会　佐久埋蔵文化財調査センター）

（小林秀行）

## (9) 腰巻遺跡

所　在　地：佐久市大字上平尾字腰巻426，636番地ほか

調 査 期 間：昭和62年９月24日～同年12月５日

調 査 面 積：3,300㎡

遺跡の立地：湯川左岸の低位段丘と崖堆物により形成された緩斜面

時代と時期：縄文時代早期末～近世

遺跡の特徴：古墳時代から平安時代にかけての居住域と生産域

主な検出遺構

| 時期＼遺構 | 竪穴住居址 | 土壙 | 溝 | その他 |
|---|---|---|---|---|
| 古　墳 | 1 | | | 竪穴状遺構1<br>畠址1<br>焼土址1 |
| 奈　良 | | | | |
| 平　安 | 1 | | | |
| 中　世 | | | 1 | |
| 近　世 | | | 4 | |
| 不　明 | | 1 | | |

主な検出遺物

土器・陶磁器：縄文早期末・後期初頭土器，土師器，須恵器，灰釉陶器

石　　器：打製石斧，石鏃，磨石

そ　の　他：銭貨

本遺跡は湯川左岸に形成された低位段丘上と崖堆物により形成された氾濫原に接する緩斜面に位置する。今回の発掘調査に先駆け，佐久埋蔵文化財調査センターにより当調査区に南接する地区の発掘調査が行われ，古墳時代前期・平安時代後半の竪穴住居址及び中世の溝が検出されている。したがって，当調査区においても同時期の遺構の存在が予想された。

本年度は，低位段丘面の北半を残し調査を行った。崖堆物により形成された緩斜面部分には，傾斜方向及びそれに直交する方向に幅２ｍ合計５本の延102ｍのトレンチを入れた。しかし，遺構は検出されなかった。段丘面は面的な調査を行い，古墳時代から近世の遺構を検出した。以下，時代を追って概要を述べる。

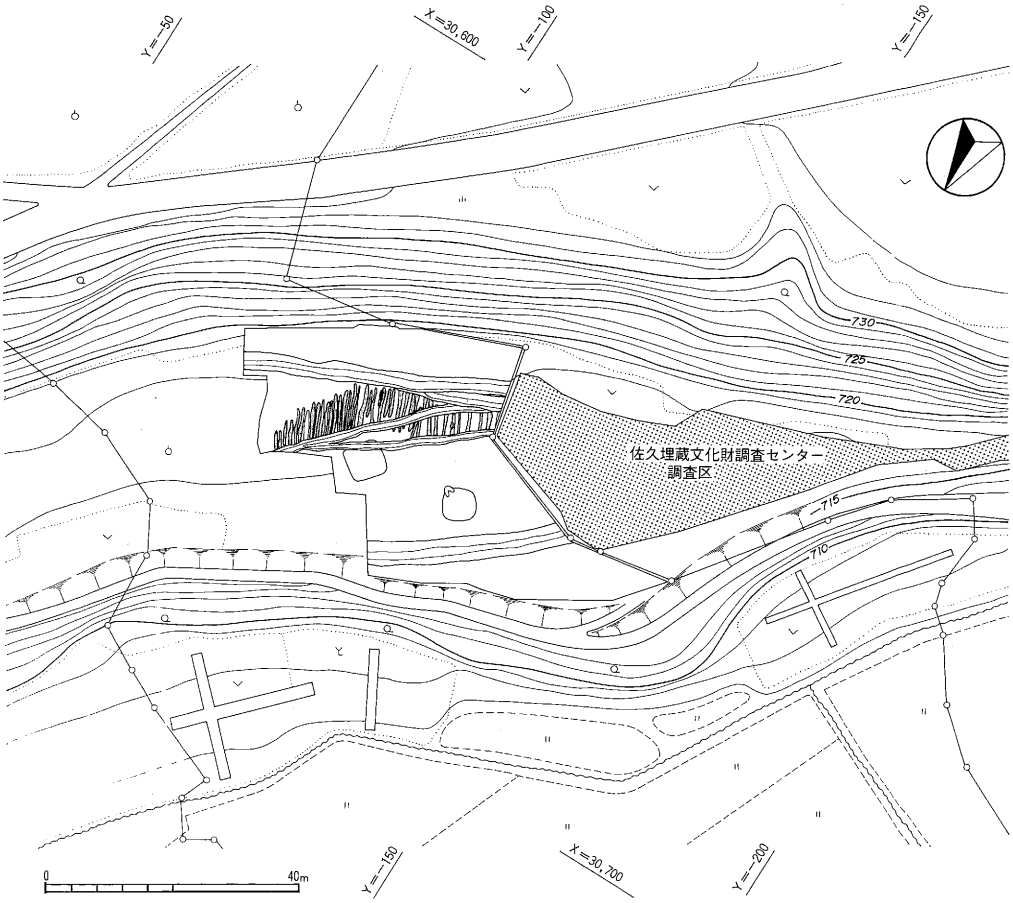
縄文時代　段丘面の中央から断崖にかけて早期末・後期初頭土器と打製石斧等が散在的に出土した。

古墳時代前期　調査区中央付近では，黒色土層の上方部分が古墳時代前期の包含層となっており，その下面で竪穴住居址１軒及び焼土を伴う長辺3.4ｍ・短辺２ｍの長方形の竪穴状遺構１基が検出された。住居址の覆土中には炭化材と焼土がレンズ状に堆積し，焼失家屋の可能性が考えられる。

平安時代後半　南西部分から羽釜を伴なう竪穴住居址１軒が検出された。竪穴住居址は不整方形を呈し南東隅に石組みカマドを構築している。

中世　段丘外縁沿いに幅４ｍ弱・深さ1.5ｍ前後断面Ｖ字状の大きな溝が，佐久埋蔵文化財調査センターの調査に引きつづき検出された。

その他　断崖寄りのところでは，表土下面より４本の溝が段丘方向に沿って検出された。溝中には表土が覆土となって堆積している。近世の所産であろうか。また，段丘方向に直交する方向で並ぶ畝状遺構を，古墳時代前期の包含層である黒色土層上面で検出した。この畝状遺構はその中央で畝幅50～60㎝で規則的に並ぶ北西部分と畝幅100～150㎝で不規則に並ぶ南東部分




第24図　腰巻遺跡全体図（1：1,200）

とに大別される。層位的にみて，古代のいずれかの時期に比定できようが，時期の限定については，なお多分に検討の余地を残している。

今年度の調査では古墳時代前期と平安時代後半において居住域であったことがわかったが，これは佐久埋蔵文化財調査センターにより竪穴住居址が検出されていることからも小規模ながら集落を営んでいたことは自明である。しかし，その規模が拡大するかは来年度以後の調査課題であろう。古代を中心に低位段丘に立地する小規模な遺跡の性格を，周囲の遺跡の実態および自然環境を背景に，今後多角的に分析し明らかにしていきたい。

（寺島俊郎）

## ⑽ 栗毛坂遺跡

所　在　地：佐久市大字岩村田字栗毛坂3969番地，東赤座頭3768－1番地，久保田頭106－1番地ほか
調 査 期 間：昭和62年４月６日～昭和62年12月26日
調 査 面 積：61,744m²（総計70,700m²）
遺跡の立地：湯川右岸の河岸段丘，及び，蟹沢の田切り地形に挟まれた台地
時代と時期：縄文時代早期～後期，古墳時代～平安時代，中・近世
遺跡の特徴：縄文時代早期末～前期末の集石群，古墳時代前期から中世の居住域・生産域

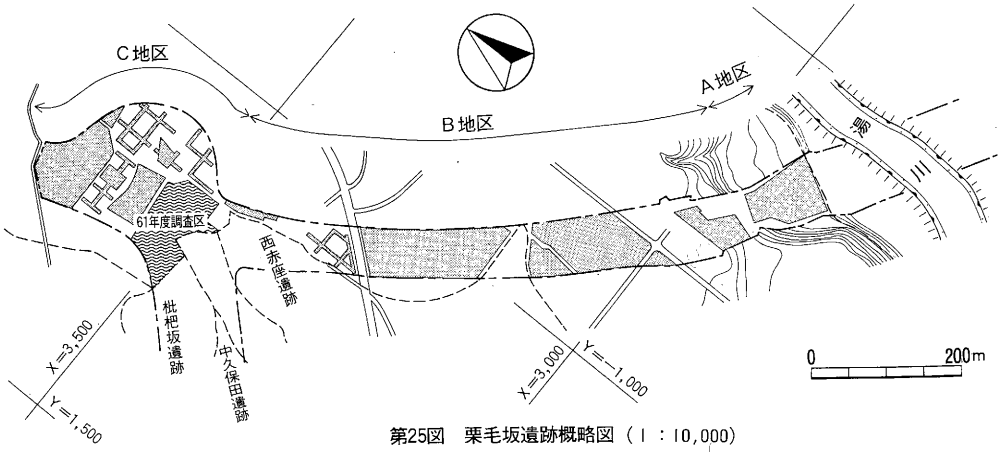
主な検出遺構

| 遺構／時期 | 竪穴住居址 | 掘立柱建物址 | 土壙 | 溝 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|
| 縄文 | | | 15 | | 集石群 |
| 古墳 | 17 | 1 | | | 畠址２ 竪穴状遺構１ |
| 奈良 | 8 | 10 | 38 | | |
| 平安 | 69(74) | 79(87) | 30 | | 竪穴状遺構２ |
| 中世 | 4 | 12 | 56 | 5 | 井戸２，柵列１ |
| 不明 | | | 472(611) | 41 | 焼土址 |

主な検出遺物

土器・陶磁器：縄文早期～後期土器，土師器，須恵器，灰釉陶器，中近世陶磁器
土　　製　　品：羽口
石　　製　　品：打製石斧，石鏃，石匙，抉状耳飾，紡錘車，臼玉，石臼，砥石外
鉄　　製　　品：刀子，鉄斧，鎌，紡錘車
そ　の　他：銭貨，か帯

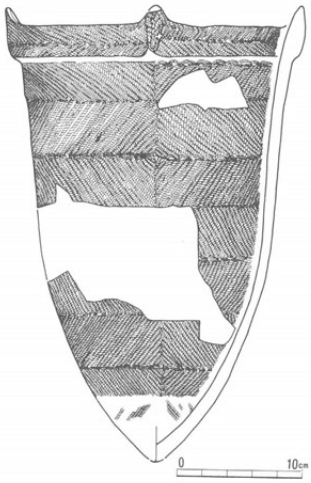
本遺跡は，浅間山の南麓末端部の裾野平地面に占地する。調査対象区域は遺跡の南端に当り湯川と蟹沢により形成された田切り地形に挟まれた東西約１kmにおよぶ台地及び湯川右岸の低位段丘で構成される。その標高は段丘面約700m，台地は南東縁から北西へ727m～742mを測る。台地南東縁から段丘面にかけては，25mの断崖となっており，また台地は県道佐久・軽井沢線の東側で５mの緩やかな段差があり，東の下面と西の上面に２分される。本年度の調査は前年度に調査したインターチェンジの一部と残件箇所を除くほぼ全面を対象とし，湯川の低位




第25図　栗毛坂遺跡概略図（１：10,000）

段丘面，台地上の本線部分，同インターチェンジ部分をそれぞれA・B・C地区として行った。その結果，占地を変えながらも縄文時代早期～後期，古墳時代～中世に至るまで継続的に営まれる複合遺跡であることが確認された。以下，地区毎に記述する。

A地区　低位段丘面の南半が調査の対象になった。現状は，高位段丘崖からの豊富な湧水を利用した水田である。土層堆積状況は複雑で，風・水成，崩積成，集石成堆積物が混交し，更に造成時の切・盛土も一部で認められた。ことに崖堆物は旧地形を大きく変容させている。今でこそ棚田を形づくる程の傾斜を示すが，少なくとも古墳時代後期までは低位段丘縁に小起伏がみられ，高位段丘沿いは湿性植物が群生する湿地を形成していたようである。縄文時代及び古墳時代を主として遺構・遺物を検出したがこれらはすべてこの小起伏部に分布する。



第26図　栗毛坂遺跡A地区
出土土器実測図（1：6）

縄文時代は，早期末～前期末が主体で，他に中・後期の遺物も認められた。土壙，集石群，遺物集中区等を確認したが，竪穴住居址は存在しない。特記すべきは，広範な広がりをみせる集石群である。但し，集石群といっても礫の集中する箇所はむしろ少く，散在する礫で個々の集石を構成し，場所によってはそれすら抽出できない程の散在振りであった。焼土を伴わず，検出された土壙との関連性も看取し得ない。同一面より，早期末～前期末の土器片とともに未製品を含む石器及びフレーク類が多量に出土しており，当該期の石器製作関連遺構の可能性が高いと考えている。

古墳時代には，前期初頭・中葉と後期後半の集落を営んでいる。計11軒の竪穴住居址を検出した。前期の集落については，初頭から中葉にかけ，遺物，住居構造双方で段階的変化を追える良好な資料となろう。群馬県との共通性を指摘し得る土器が出土したことも注目される。また，後期の住居址内からは，良好な一括資料を得ている。

平安時代～中世の遺物も少なからず出土しているが，該期の遺構を認めることはできなかった。時期比定の困難な土壙，溝址の中に該当するものがあるかもしれない。それとは別に，高位段丘際では平安時代の遺物を採集しており，台地上の集落がここを「捨て場」として利用したこともあったようである。

第27図　栗毛坂遺跡A地区集石群

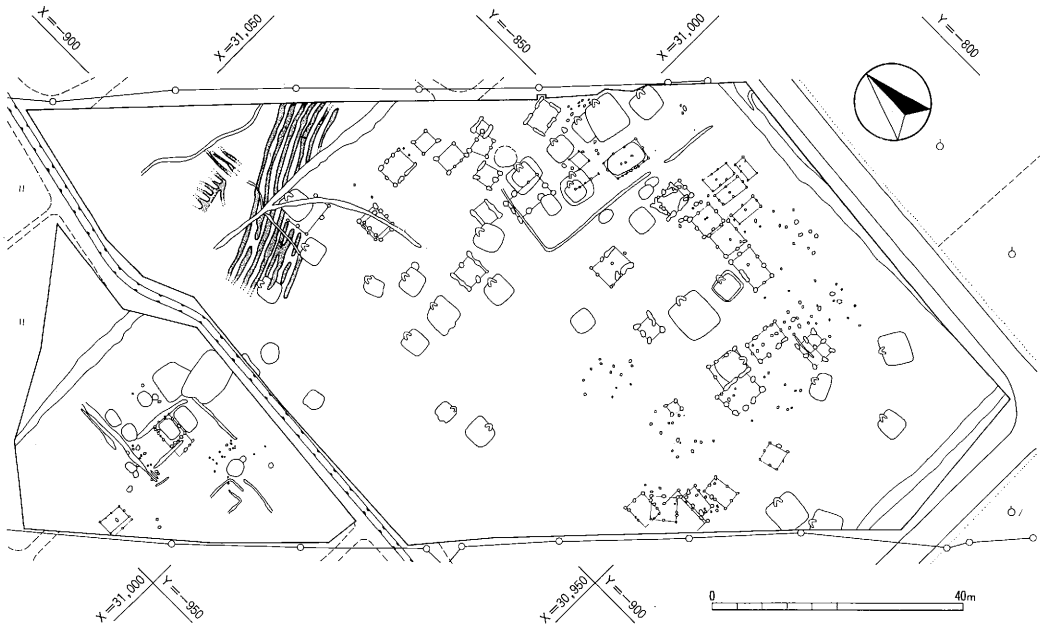
なお，小起伏部南半は水田造成時に整地されており，かろうじて掘方やコーナーだけを残す竪穴住居址がみられた。失われた遺構も少なくないのではないかと思われる。

B・C地区　上位面はC地区に，下位面はB地区にほぼ相当する。現状は水田とりんご，桃の果樹園となっている。検出された遺構は住居址が中心で，古墳時代前期から平安時代後半，

中・近世と大きく２段階に分れて存在する。時代を追ってその分布をみると次のようになる。

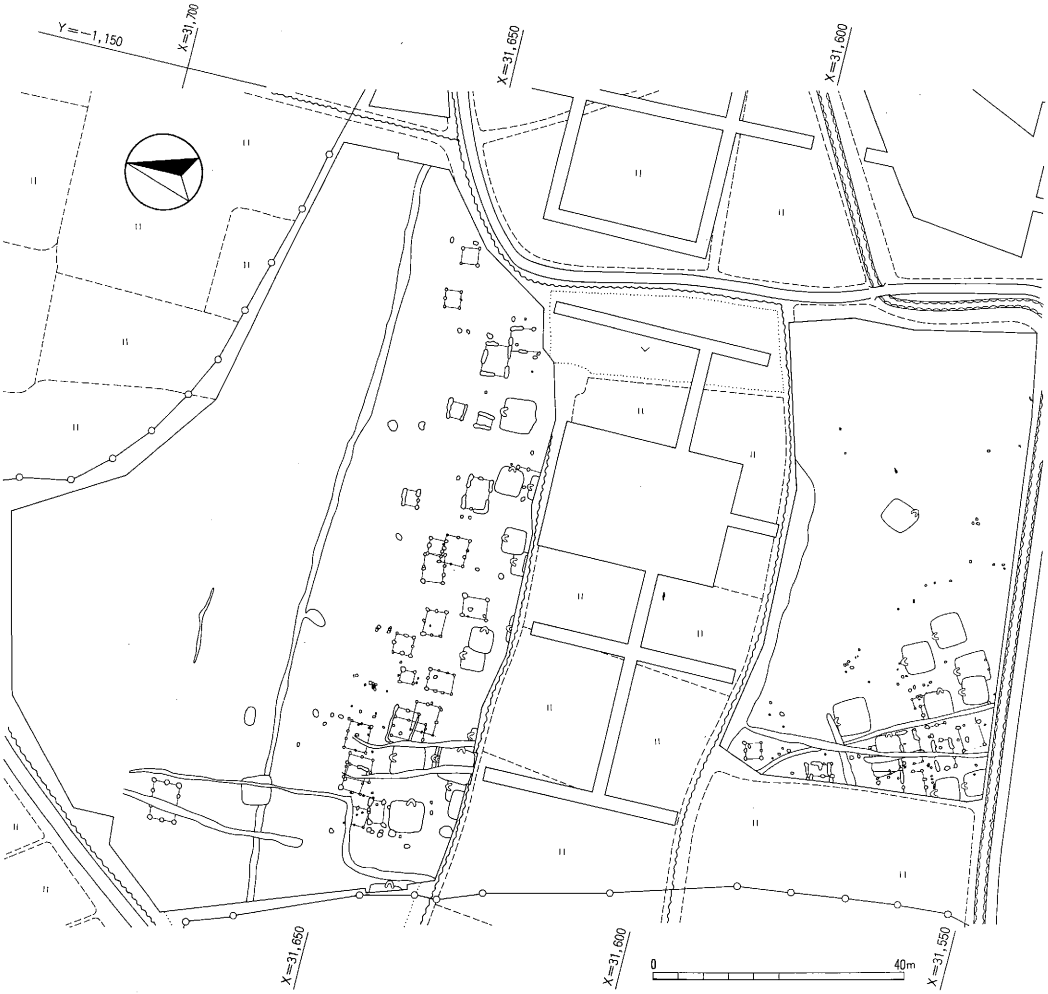
最初に集落が成立するのはＢ地区東部であり古墳時代前期から後期にかけて散在的に広がっている(竪穴住居址６軒)。奈良時代にはＢ地区中央西部でＣ地区から延びる上位面の東縁部に小規模な遺構分布が見られる（竪穴住居址８軒･掘立柱建物址10棟)。平安時代に入ると，Ｂ地区では東部から中央東部に拡大し，Ｃ地区と共に急激に遺構数が増加する。しかし，平安時代後半に至ると各地区に１～２軒の竪穴住居址が検出されるのみである（Ｂ地区竪穴住居址39軒・掘立柱建物址46棟，Ｃ地区竪穴住居址30軒・掘立柱建物址33棟)。中世の遺構はＢ地区中央部に各々約100mの間隔をもって３か所に分布する。

集落規模が拡大する平安時代前半ではその検出遺構数から竪穴住居址と掘立柱建物址の数がほぼ同数に近く，若干ではあるが掘立柱建物址の数が上回る。その掘立柱建物址は，『坪掘り』と『溝もち』の２種類の掘り方をもつものに大別される。この『溝もち』の建物址は長野県では東信地方にのみみられるもので関東地方の様相に近い。また竪穴住居址と掘立柱建物址には主軸方向に統一性が認められ，大きく２～３のグループに分れそうである。このことはＣ地区の調査において顕著に表れ，南北に主軸方向をもつ北集団と北西南東方向に主軸方向を持つ南集団に大別することができる。昨年度の調査で検出された遺構は南集団に北接するものであったが，南集団と同主軸方向をもつことからこの集団に含まれることが分った。竪穴住居址内のカマド・柱穴・ピット等諸施設の配置・形態・有無等からの住居址の形態差が有るようである。土器では甕に特徴がある。いわゆる『武蔵型』の甕で奈良時代から平安時代にかけての土

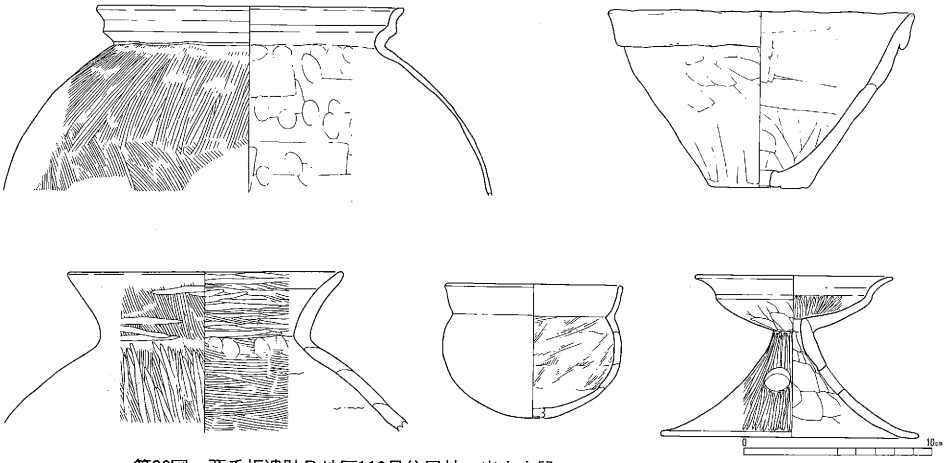



第28図　栗毛坂遺跡Ｂ地区(東部)全体図（１：1,200)

器組成の中で普遍的に用いられている。このことは掘立柱建物址の掘り方と共に関東地方に共通する様相を色濃く示している。




第29図　栗毛坂遺跡C地区全体図（1：1,200）




第30図　栗毛坂遺跡B地区113号住居址、出土土器（1：4）

こうした遺構分布状況の中で，Ｂ地区では，平安時代前半の集落が形成される以前，古墳時代の遺構の検出された地区の北西方向80mの地域から２枚の畠址が検出された。それは北東から南西にかけて伸びる畝とそれに直交する畝とが隣接したもので，面積約520m²を測った。この地域では，数度にわたる洪水の発生のあったことが砂の堆積によって判明したが，畠址が砂に覆われた後，その上に平安時代前半の住居址が構築され集落が営まれていることは注目される。

中世以降になると前記したように３か所の遺構分布がみられた。東２か所からはいわゆる竪穴状遺構に柱穴が取り囲む遺構・掘立柱建物址・井戸址等を中心としたまとまりで検出され，双方から鉄滓・障壁とフイゴの破片が出土している。西端では掘立柱建物址群と井戸址が検出された。掘立柱建物址は梁２間×桁３間の身舎に３～４面の庇を持つと思われる３棟の建物址を中心に，１間×５間・２間×３間の建物が近接して建てられている。中でも２間×３間の４面庇と思われる建物址には周囲１mの足場用の柱穴と思われる柱穴が巡っているものが存在する。この掘立柱建物址群は３～４回の建て直しが考えられる。この前者と後者とでは，住居址の形態・規模等から大きな差異がみられる。

Ａ地区では縄文時代と古墳時代，Ｂ・Ｃ地区では古墳時代後期から中世を主体とした遺構群の存在が明らかになった。一部時間を共有することがあっても，ＡとＢ・Ｃ地区ではかなり性格が違うようだ。

Ａ地区では縄文時代の遺跡が発見されたこと自体，平野部での調査例の少ない佐久地方にとって貴重な資料となった。石器製作址とも考えられる集石群に至っては，さらに稀少である。なお検討の余地を多分に残しているが，集石構造の解明及び石器・フレーク類の観察を軸に整理をすすめ実相把握に努力したい。古墳時代前期の資料については，佐久地方の地域性の解明及び編年研究の好材料となるだろう。Ｂ・Ｃ地区では，集落の移動・拡大縮小を顕著に繰り返し，また，複数の集落で構成されることもあったようだ。洪水性堆積物が広範に分布することから，それには自然環境の変化も影響したらしい。古墳時代後期以降の集落を多角的視点で分析することが，今後の最重要課題と言えよう。

（寺島俊郎・宇賀神誠司）

## ⑾　西赤座遺跡

所　在　地：佐久市大字岩村田字大馬久保129－２番地ほか
調 査 期 間：昭和62年４月13日～同年６月25日
調 査 面 積：5,700㎡
遺跡の立地：浅間山南麓末端部の田切り地形に挟まれた台地
時代と時期：縄文時代，弥生時代，平安時代，中・近世，近代
遺跡の特徴：近代における耕地整理の跡

主な検出遺構

| |
|---|
| 近　　代：耕地整理址１ |
| 時期不明：土壙43・溝30 |

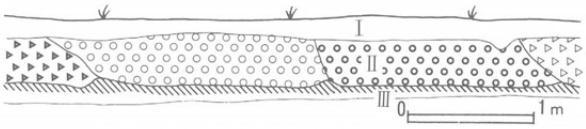
主な検出遺物

土器・陶磁器：縄文土器，土師器，須恵器
　　中世～近代陶磁器
石　　器：打製石斧
そ　の　他：銭貨

調査対象区域は，遺跡の北端にあたる。宅地範囲約1,000㎡を残し調査した結果，小規模な田切り地形に挟まれた台地上に，多数の小ピット，溝及び近代の所産と思われる耕地整理址を検出した。

この耕地整理址は，現水田耕土（Ⅰ），埋立て土（Ⅱ），さらにその下層の旧水田耕土（Ⅲ）の堆積状況に特徴がみられる。現水田耕土下の埋立て土は，幅２ｍの一定間隔で連続して堆積し，それぞれローム，砂礫及び黒褐色土からなる。その範囲は1,500㎡にわたり，縞状に東西６列，北西から南東に17列確認された。その下層の旧水田耕土面は，ほぼ平坦であるが，帯状の盛上がり（幅20㎝，高さ５㎝）が，約1.8ｍの等間隔で，上層の埋立て土の縞目と同方向に23本並んでいる。一見，手畦のように見えるが，削平時の残痕と考えられる。これらの状況から，本址は，旧水田面の削平→埋立て→現水田面の形成という。一連の耕地整理のあり方を示すものと考えられる。今後，当時の農業土木の手法にまで及んだ究明が課題であろう。

第31図　西赤座遺跡耕地整理址




第32図　西赤座遺跡耕地整理址断面図（１：60）

（小林秀行）

## ⑿ 枇杷坂遺跡

所　在　地：佐久市大字岩村田字上久保田向251－1，2番地ほか
調 査 期 間：昭和62年10月5日～同年11月19日
調 査 面 積：8,330m²
遺跡の立地：浅間山の南麓末端部分の田切り地形に挟まれた台地
時代と時期：縄文時代，奈良時代，平安時代
遺跡の特徴：平安時代の集落

主な検出遺構

| 時期＼遺構 | 竪穴住居址 | 土　壙 | 溝 |
|---|---|---|---|
| 平　安 | 3 | | |
| 不　明 | | 6 | 3 |

主な検出遺物

土　器：土師器，須恵器
石　器：石鏃
鉄製品：鉄鏃，刀子，U字形鉄製品

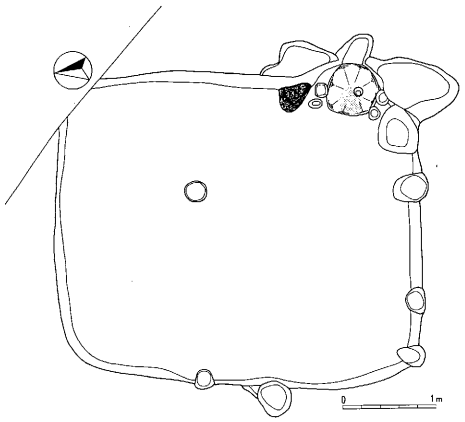
浅間山の南麓末端部分の田切り地形に挟まれた台地は，本遺跡をはじめ栗毛坂遺跡，中久保田遺跡，長土呂遺跡等が広がる遺跡密集地である。

調査対象区域は仙禄湖の南東部と南西部からなる。南東部側は，水田造成の際に地山層が削平を受け，かつ田切り地形を含むことから遺存する遺構はない。しかし，台地状地形をなす南西部側においてのみわずかに平安時代前半の竪穴住居址等の遺構を検出した。

竪穴住居址については，二つの構造的な特性が認められる。一つは，カマドの構造である。煙道の左右外縁に一段高い張り出し部を有し，その張り出し部の底面は，黒褐色粘質土で貼り固められ堅緻であった。もう一つは，主柱穴の配置である。4主柱穴のうち3本を，カマドの位置に合わせるように壁中に配してあった。このようなカマドの位置と主柱穴の配置との関係は，上屋の構造・室内空間の利用といった2面からの課題を提起するものである。

また，この平安時代の集落は，北東から南西に伸びる田切り台地縁辺部に限って存在するものと考えられる。調査対象区域内にみられる集落の構造については，今後居住域と生産域といった土地利用や自然環境等，他の調査や研究の成果と関連づけながら，多角的に分析することが必要である。来年度の調査，および隣接する佐久市教育委員会による調査の成果が待たれる。

（二木　明）




第33図　枇杷坂遺跡1号住居址平面図（1：80）

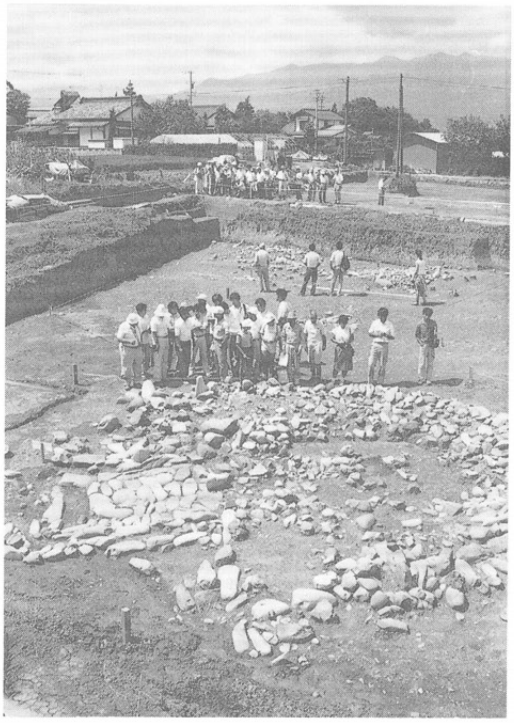
# II　普及・研究活動の概要

## 1．現地説明会

(1)　北村遺跡（東筑摩郡明科町光）

北村遺跡において２度実施した。まず，昭和62年８月９日，国道19号線の西側にあたるＢ地区およびＣ地区で行う。Ｂ地区では平安時代の集落址を，縄文面まで調査が進んでいたＣ地区では縄文時代後期の柄鏡形敷石住居址を中心に現場を公開した（第34図）。現地では出土遺物の展示も行い，資料を作成配布して，調査研究員が説明にあたった。夏休み中ということもあり，地元の方のみならず県外の方の来場も多く，盛況の内に終了することができた。見学者249名。

続いて，昭和62年11月３日，ＪＲ篠ノ井線東側のＥ地区で実施された。ここは現在までのところ内陸部では最大規模をもち，なおかつ，保存状態の良い人骨を多数伴う，縄文時代中期～後期の墓壙群が検出されたことで各方面の関心を集めていたこともあって，県内各地から約700名の見学者が集まった。資料を配布し，20名前後のグループごとに発掘担当者が案内をしたが，午前中いっぱい見学者の列がとだえない盛況ぶりであった。



第34図　現地説明会風景

(2)　野口遺跡（東筑摩郡麻績村）

麻績村教育委員会の要請により，昭和62年９月７日(月)の午前中，発掘作業と並行して現地説明会を行った。検出遺構が少なく，遺物出土状態など見学にたえる期間が限られたことと，調査地の道路事情が悪いため，説明会の案内は麻績村の有線放送に限った。村内の発掘調査としては11年ぶりのことであり，説明会以前から関心が高く，平日の開催にもかかわらず，115名の見学者が訪れた。説明にあたった調査研究員に活発な質問が投げかけられ，調査後の展示会を求める声も聞かれて大盛況に終った。また，当日の模様は麻績村公

民館報，筑北農協広報に大きくとりあげられた。

(3) 栗毛坂遺跡（佐久市岩村田）

昭和62年8月2日，午前9時30分～午後3時30分。栗毛坂遺跡A地区，B地区で合同現地説明会を開催した。

第一会場（B地区）　古墳時代から平安時代にかけての遺構を中心とした集落址。

第二会場（A地区）　古墳時代の遺構を中心とした集落址および縄文時代の集石群。

当日は晴天にも恵まれ，多数の見学者がおとずれた。なかでも第一会場では密集した数多くの住居址，第二会場では広範囲にわたる集石群が注目をあびた。また，第一会場では復元された古代の食膳具を各時代ごとに並べ，第二会場では縄文時代(早期～後期)の土器片や石器を展示し好評を博した。見学者の中には，説明にあたった調査研究員に質問をする者もあり，埋蔵文化財に対する地域住民の関心の高さをうかがわせていた。(見学者約300名)

## 2．展示会

(1) 中央自動車道長野線麻績村遺跡出土品展示会

麻績村教育委員会の要請により，昭和62年11月3日(火)に，同村野口遺跡の出土品等を村民文化祭に展示した。今年度は準備期間が短かったが，よりわかりやすい展示をめざして資料等を作成した。内容は，野口遺跡の調査成果をテーマとして，麻績村の歴史と遺跡，発掘・整理の手順を加えたもので，出土遺物を中心にパネル・地図・年表・イラストで構成した。展示スペースは壁一面と小規模であったが，見学者は450名にのぼり，各種展示の中でも特に好評を博した。現地説明会に続き，村民の埋蔵文化財に対する関心の高さをうかがわせた。

(2) 関越自動車道上越線関連遺跡発掘調査出土品展

昭和63年3月3日(木)～6日(日)の4日間，長野県佐久創造館において「関越自動車道上越線関連遺跡発掘調査出土品展」を開催した。

佐久調査事務所では，出土品展を迎えるにあたり，整理作業の遺物観察・接合・復元の作業と合わせて，各時代ごとの研究会をつくり出土品の研究を重ねた。展示方法でも，縄文時代，弥生時代，古墳時代，奈良・平安時代，中・近世の5つに時代区分をし，時代順に見学できるように配慮するとともに，全体をとおして，写真や復元図を掲示して見学者に理解しやすいように工夫をした。

展示品は，昭和62年度の発掘調査で，佐久市内12遺跡から出土した遺物で，土器約150点，石器約200点，金属器約50点，その他貨幣，炭化物等あわせて400点余りを展示した。展示のうえでも，平安時代のカマドの煙道部の復元，墨書・刻書土器コーナー，栗毛坂遺跡B地区18号竪穴住居址出土品の一括展示，ほかに路線図，航空写真，発掘調査風景の写真を

展示したり，縄文土器の施文を体験してもらうコーナーも設けた。ともに好評を博した。

当日は長野県佐久創造館の第７回「創造展」との同時開催ということもあり，予想以上の見学者を得ることができ，これによって地域住民の埋蔵文化財に対する意識の向上に多少とも役立ったことができたと考える。４日間で合計1,000名（３日―100名，４日―180名，５日―315名，６日―405名）の見学者があり，盛況のうちに終ることができた。

第35図　展示会風景

## ３．研究会・学習会

研究・研修活動として，講師として招聘し，あるいは，来所の機会をとらえて，多くの方々から御指導や御助言をいただき，研究会･学習会等も開催しました（第４表）。このうち「灰釉陶器学習会」と「古代・中世土器学習会」についてその概要を記したい。

灰釉陶器学習会

昭和62年11月12日・13日　松塩筑調査事務所

指導者　斉藤孝正氏（名古屋大学文学部助手）

吉田川西遺跡をはじめとする松本平の遺跡を調査する中で，多数の平安時代の遺物が出土した。それらの遺物については現在整理中であるが，そのうち灰釉陶器について，整理の方法に関する指導と実際にそれぞれの灰釉陶器の窯式比定をしていただくため，斉藤孝正氏を指導者として招いた。２日間にわたり，実際に多数の灰釉陶器の窯式を比定していただきながら，細部にわたり観察の観点の指導をうけた。また，現在の灰釉陶器の研究の現状についてもお聞きすることができた。その中で東濃窯での灰釉陶器編年の再検討が行われていることや，年代観について見直しが行われていることなど，生産地の最新の研究の成果に触れることができた。特に後者は紀年銘資料のない松本平において，年代を決める上で灰釉陶器は重要な位置を占めているため，大変参考になった。

古代・中世土器学習会

昭和63年３月７日・８日・９日　松塩筑調査事務所

指導者　吉岡康暢氏（国立歴史民俗博物館教授）

松本平ではここ数年の調査の中で，古代から中世にかけての土器の膨大な資料を得た。それらの資料は，これまであまり研究が進んでいなかったこの時期の土器の変容を考えるうえで重要な意味を持つものといえる。そこで，今回は吉田川西遺跡の資料整理の中から考えられた古代から中世の土器の変容のあり方について，吉岡康暢氏を指導者として，検討を行うこととなった。指導は実際に遺物を前にして行われ，土器一つ一つの細部の変化や大きな土器の変容の段階区分，他地域の土器様相との比較，土器変容の背景にある問題までいろいろと御指導をいただいた。この他にも墨書土器・金属器・古代集落などについてもその分析のしかたについて指導を受けることができた。これらの点は報告書をまとめていくうえで大いに参考になった。

また，吉岡氏には，センター職員を対象として「中世土器研究の現状」ということで講演していただいたが，これから中世の土器の研究を進めていくうえでの重要な観点を示していただき参考となった。

第４表　講師招へい及び来所による指導・講習会

| 期日 | 講師 | | 研修内容 |
|---|---|---|---|
| 62. 4. 14 | 長野大学教授 | 野原　健一 | 吉田川西遺跡出土鉄製品について |
| 5. 28 | 山梨県立埋文センター | 坂本　美夫<br>田代　孝 | 吉田川西遺跡出土緑釉陶器について |
| 6. 24 | 埼玉県埋文事業団 | 高橋　一夫<br>中村　倉司 | 弥生初～古墳時代初期の土器について |
| 6. 31 | 富山大学教授 | 秋山　進午 | 松塩筑出土品全般(学生15名同行) |
| 7. 15 | 信州大学助教授 | 酒井　潤一 | 栗毛坂遺跡Ａ地区の地質について |
| 7. 17 | 宮崎大学助教授 | 藤原　宏志 | 石川条里調査について |
| 8. 2 | 群馬県埋文事業団 | 岩崎　泰一<br>他８名 | 松塩筑出土品全般 |
| 8. 20 | 愛知県埋文センター | 青山　光一<br>他１名 | 松塩筑出土品全般 |
| 8. 24 | 長野県遺跡調査指導委員 | 戸沢　充則<br>他４名 | 北村遺跡現場指導 |
| 8. 28 | 明治大学教授 | 小林　三郎 | 松塩筑出土品全般(学生10名同行) |
| 9. 1 | 群馬県埋文事業団 | 三浦茂三郎<br>他５名 | 松塩筑出土品全般 |
| 10. 13 | 日本大学助教授 | 鈴木　保彦 | 北村遺跡現場指導 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 10. 14 | 信州大学医学部助手 | 西沢　寿晃 | 北村遺跡現場指導 |
| 10. 16 | 文化庁文部技官 | 岡村　道雄 | 北村遺跡現場指導 |
| 10. 21 | 信州大学教授 | 小林　　詢 | 松本平の地形調査指導 |
| 〃 | 茨城県教育財団 | 岩上・津上 | 松塩筑出土品全般 |
| 10. 26 | 埼玉県埋文事業団 | 早川　智明<br>坂野　和信 | 3事務所現場・出土品全般 |
| 10. 29 | 信州大学医学部助手 | 西沢　寿晃 | 北村遺跡現場指導 |
| 10. 30 | 信州大学教授 | 大参　義一<br>他30名 | 松塩筑出土品全般 |
| 11. 5 | 明治大学教授 | 戸沢　充則 | 北村遺跡現場指導 |
| 〃 | 古代吉備文化財センター | 内藤他2名 | 松塩筑出土品全般 |
| 11. 7 | 東京大学助教授<br>独協医大助教授 | 赤沢　　威<br>馬場　悠男 | 北村遺跡現場指導 |
| 11. 8 | 鷹山遺跡調査団 | 他9名 | 松塩筑出土品全般 |
| 11. 12 | 名古屋大学 | 斉藤　孝正 | 古代土器をめぐる研究会 |
| 11. 19 | 橿原考古学研究所副所長 | 石野　博信 | 北村遺跡現場指導 |
| 12. 8 | 山梨県立埋文センター | 坂本　美夫<br>他1名 | 松塩筑出土品全般 |
| 12. 16 | 京都市埋文研究所 | 平尾・小森 | 松塩筑出土品全般 |
| 63. 1. 26 | 長野県史刊行会 | 宮下　健司<br>桐原　健他 | 佐久平古代集落研究会 |
| 1. 29 | 横浜市埋文センター | 石井　　寛 | 松塩筑出土品全般 |
| 1. 30 | 栃木県文化振興事業団 | 後藤　信祐<br>他2名 | 佐久出土品全般 |
| 2. 2 | 長野県遺跡調査指導委員 | 戸沢　充則<br>他4名 | 北村遺跡現場指導 |
| 3. 2 | 長野県史刊行会 | 宮下　健司<br>桐原　健他 | 松本平古代集落研究会 |
| 3. 7 | 国立歴史民俗博物館 | 吉岡　康暢 | 古代・中世土器学習会 |
| 3. 9 | 広島県埋文センター | 松井　和幸 | 松塩筑出土品全般 |
| 3. 16 | 三重県文化課 | 河北・宮田 | 松塩筑出土品全般 |
| 3. 23 | 広島県埋文センター | 青山他2名 | 松塩筑出土品全般 |

## 4．刊行物

『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2』（塩尻市内その1）

『長野県埋蔵文化財センター年報　4』（1987年度）

『長野県埋蔵文化財センター紀要　1』（1987年度）

『長野県埋蔵文化財ニュース』　No.21～24（4冊）

# III　機構・事業の概要

## 1．機　構

(1)　組織

○理事会

理 事 長(県教育長)
副理事長
常務理事(3名)
理　　事(県企画局長)
〃　(県高速道局長)
〃　(県教委文化課長)
〃　(県考古学会長)
〃　(市町村長代表)
〃　(市町村教育長代表)
〃　(考古学研究者代表)
12名

監　　事(県会計局会計課長)
〃　(県教委総務課長)
2名

○事務局

- 事務局長
  - 総務部長 ― 主査・主事2名
  - 調査部長
- 長野調査事務所所長(兼常務理事)
  - 庶務部長 ― 主査・主事2名
  - 調査部長 ― 調査研究員8名
- 松塩筑調査事務所所長(兼常務理事)
  - 庶務部長 ― 主　査　1名
  - 調査部長 ― 調査研究員27名、調査員　1名
- 佐久調査事務所所長(兼常務理事)
  - 庶務部長 ― 主　事　1名
  - 調査部長 ― 調査研究員24名

(2)　事務所所在地

| | |
|---|---|
| 本　　部 | 長野市大字南長野字幅下692―2　長野県教育委員会事務局文化課内 |
| 事務局 | 長野市篠ノ井布施高田字佃963―4 |
| 長野調査事務所 | |
| 松塩筑調査事務所 | 塩尻市大字広丘高出字西原1977 |
| 佐久調査事務所 | 佐久市大字安原字蛇塚1367 |

## 2．事　業

(1)　理事会及び会計監査

理事会

○第12回理事会　昭和62年3月20日　会場　長野市　長野国際会館

第１号議案　昭和62年度事業計画書（案）について

第２号議案　昭和62年度収支予算書（案）について

第３号議案　昭和61年度収支補正予算書（案）について

第４号議案　寄附行為の一部変更について

○第13回理事会　昭和62年５月22日　会場　佐久市　佐久ホテル

第１号議案　昭和61年度事業報告書について

第２号議案　昭和61年度決算報告書について

○第14回理事会　昭和63年３月25日　会場　長野市　山王共済会館

第１号議案　昭和63年度事業計画書（案）について

第２号議案　昭和63年度収支予算書（案）について

第３号議案　昭和62年度収支補正予算書（案）について

第４号議案　監事の委嘱について

会計監査

昭和62年５月７日実施　昭和61年度事業報告書及び収支決算書について

(2)　調査事業

中央自動車道長野線及び関越自動車道上越線に係る埋蔵文化財発掘調査―長野県教育委員会からの委託

ア．調査遺跡及び面積

中央自動車道長野線関係　松本市・明科町・麻績村・坂井村地域内５遺跡　23,260m²

関越自動車道上越線関係　佐久市地域内12遺跡　104,674m²

イ．整理作業

中央自動車道長野線関係　塩尻市地域19遺跡の報告書作成，及び，塩尻市・松本市・豊科町地域13遺跡の整理作業

(3)　事業費（昭和62年度）

中央自動車道長野線関係　477,745千円

関越自動車道上越線関係　312,076千円

(4)　普及活動（46～50ページ参照）

(5)　職員研修

ア．講師招へい及び来所による指導・講習会等（49～50頁「研究会・学習会」参照）

イ．奈良国立文化財研究所関係

| 期　　間 | 日 数 | 課　　程 | 参 加 者 |
|---|---|---|---|
| 62. 5. 8～5. 11 | 3 | 自然科学的年代決定法 | 伊藤隆之 |
| 6. 16～6. 18 | 3 | 遺跡測量外注管理 | 百瀬長秀 |
| 9. 14～10. 6 | 23 | 遺跡測量 | 河西克造 |
| 10. 13～10. 15 | 3 | 自然科学的産地固定法 | 馬場長光 |
| 10. 21～11. 10 | 21 | 弥生時代遺跡調査 | 宇賀神誠司 |
| 11. 18～12. 8 | 21 | 環境考古 | 岡村秀雄 |
| 12. 15～12. 24 | 10 | 埋蔵文化財情報 | 綿田弘実 |
| 参加者７名　　延べ84日 | | | |

ウ．その他学会関係研修会，研究会

| 期　　日 | 内　　容 |
|---|---|
| 62. 4. 5　12. 5～6 | 日本中世土器研究会（於京都市）（延べ７名） |
| 5. 9～10 | 信州産業考古学会ミニシンポ（於富士見町）（３名） |
| 9. 12～13 | 日本貿易陶磁研究会（於東京）（３名） |
| 63. 2. 13～14 | シンポジウム「弥生時代環濠集落をめぐる諸問題」（於名古屋市）（３名） |
| この他，日本考古学協会・長野県考古学会など学会，研究会等出席　　延べ54名 | |

エ．県外埋蔵文化財施設，遺跡等視察研修

| 期　　日 | 視　察　・　研　究　地 | 参加者 |
|---|---|---|
| 63. 3. 9～11 | 水田址調査の実施研修と調査法　（静岡～京都） | ３名 |
| この他，埋文センター・博物館・資料館・研究施設・調査現場の訪問，視察・研修を行った。　延べ14ケ所　25名 | | |

オ．全埋文協などへの参加

| 期　日 | 会　議　名 | 開催地 | 参 加 者 |
|---|---|---|---|
| 62. 5. 15 | 埋文協関東・中部ブロック会議 | 静岡市 | 高橋副理事長<br>半田事務局長<br>堀内総務部長 |
| 6. 11～12 | 埋文協総会 | 諏訪市 | 高橋副理事長<br>他７名 |
| 6. 19～20 | 関越道関係群馬・長野連絡協議会 | 佐久～群馬 | 高橋副理事長<br>他４名 |
| 9. 10 | 「日本列島展」関東・中部ブロック準備会 | 東京都 | 樋口調査部長 |
| 9. 17～18 | 埋文協連絡協議会研修会 | 大阪市 | 堀内総務部長<br>宮沢調査部長 |
| 10. 23 | 埋文協関東中部ブロック連絡協議会 | 戸倉町 | 高橋副理事長<br>他５名 |
| 11. 12～13 | 関東甲信越静埋文行政担当者会議 | 勝田市 | 畑庶務部長<br>樋口調査部長 |
| 11. 25～26 | 関東甲信越静埋文行政担当者共同研修協議会 | 鹿沼市 | 上田典夫 |
| 12. 17～18 | 関越自動車関係４県連絡協議会 | 長野市 | 塚原所長<br>永田主査<br>伊藤所長<br>丸山調査部長 |

カ．長野県教育センター・産業教育センター研修

| 期　日 | 学校別 | 分　野 | 講　座　名 | 参　加　者 |
|---|---|---|---|---|
| 教育センター（※印　企画研修・△印　公開講座） | | | | |
| 62．5．20～22 | 高 | 学校経営 | 教頭と学校経営 | 樋口　昇一<br>丸山敞一郎 |
| 6．9～10 | 高 | 社　会 | 社会科教育基礎 | 斉藤　伸介 |
| 6．17～19 | 小中 | 道　徳 | 道徳教育の実践基礎A | 太田　典孝 |
| 6．23 | 小中 | 社　会 | ※教材の背景を考える | 小松　望<br>小林　秀行 |
| 6．23～25 | 高 | 同和教育 | 同和教育の基礎 | 小平　恵一 |
| 7．29～31 | 高 | 教育機器 | 教育機器の活用Ⅰ | 中浜　徹 |
| 8．5～7 | 高 | 社　会 | 地理巡検 | 中野　亮一<br>豊田　伸一 |
| 8．6 | 小中 | 社　会 | △地理巡検 | 田川　幸生 |
| 8．26～28 | 小中 | 特殊教育 | 自閉症児教育 | 石上　周蔵 |
| 8．27～28 | 高 | 理　科 | 臨地（化石と地質） | 望月　映 |
| 10．1～3 | 中 | 学校経営 | 教頭と学校経営 | 宮沢　恒之 |
| 10．13 | 高 | 教　養 | ※教育と国際理解 | 豊田　伸一 |
| 10．27 | 小中 | 教育機器 | ※コンピューターは「教育」をこう変える | 近藤　尚義 |
| 10．30 | 小中 | 教　養 | ※生きるということ | 太田　典孝 |
| 産業教育センター | | | | |
| 62．6．10～12 | | 教科指導 | 教材開発(2) | 太田　典孝 |
| 6．17～19<br>7．29～31 | | 情報処理 | BASICプログラミング基礎(1) | 伊藤　友久 |
| 7．6～8<br>8．10～12 | | 情報処理 | BASICプログラミング基礎(2) | 中浜　徹 |
| 10．7～9 | | 情報処理 | パソコン入門(4) | 平林　彰<br>岡村　秀雄<br>春日　文彦 |
| 10．12～14<br>11．16～18 | | 情報処理 | BASICプログラミング基礎(3) | 寺島　俊郎 |
| 10．26～28 | | 教科指導 | 教材開発(3) | 竹内　稔 |

キ．県内市町村及び関係機関への協力・指導等

| 期　日 | 市　町　村　等 | 協力・指導内容等 |
|---|---|---|
| 昭和62年4月<br>～<br>昭和63年3月 | ・中野市ほか2市3町1村<br>・長野県史刊行会ほか8ケ所<br>・塩尻市公民館ほか2ケ所 | ・市町村教委発掘，整理，報告書づくり，展示<br>・市町村誌編集<br>・考古学講座講演 |
| 延べ22回　　協力・指導延べ27名 | | |

## 昭和62年度役員及び職員

| | |
|---|---|
| 理事長 | 村山　正（県教育長） |
| 副理事長 | 高橋　弘典 |
| 常務理事 | 三村　忠幸　塚原　隆明　伊藤万寿雄 |
| 理事 | 山極　達郎（県企画局長）　小山　一郎（県高速道局長）<br>濱　篤（県教委文化課長）　森嶋　稔（県考古学会長）<br>和合　正治（松本市長）　奥村　秀雄（長野市教育長）<br>林　茂樹（考古学研究者） |
| 監事 | 関　四郎（県会計局会計課長）　岡田　泉（県教委総務課長） |

### 事務局

| | |
|---|---|
| 事務局長 | 半田　順計 |
| 総務部長 | 堀内　計人 |
| 調査部長 | 樋口　昇一（兼） |
| 主査 | 永田　伸男 |
| 主事 | 笠井　浩（兼） |

### 調査事務所

| | 長野調査事務所 | 松塩筑調査事務所 | 佐久調査事務所 |
|---|---|---|---|
| 常務理事所長 | 塚原 降明 | 三村忠幸 | 伊藤万寿雄 |
| 庶務部長 | 半田 順計（兼） | 堀内 計人（兼） | 畑　幹雄 |
| 調査部長 | 樋口 昇一 | 宮沢 恒之 | 丸山敞一郎 |
| 事務職員 | 主査　永田 伸男（兼）<br>主事　笠井　浩 | 主査　藤森 幸枝 | 主事　六川 直利 |
| 調査研究員 | 田川 幸生　福島 厚利<br>宮尾 栄三　春日 文彦<br>三上 徹也　綿田 弘実<br>伊藤 友久　斉藤 伸介 | 関　全寿　松田 青樹<br>西牧 尚人　小松　望<br>小林　上　青沼 博之<br>唐木 孝雄　百瀬 新治<br>岡沢 秀紀　小平 和夫<br>小口　徹　原　明芳<br>小林 俊一　竹内　稔<br>石上 周蔵　太田 典孝<br>大竹 憲昭　平林　彰<br>上田 典男　百瀬 長秀<br>金原　正　望月　映<br>市村 勝巳　市川 隆之<br>野村 一寿　寺内 隆夫<br>西山 克巳 | 木内 行雄　臼田 武正<br>伊藤 隆之　吉沢 信幸<br>井上 城典　和田 文人<br>小林 秀行　馬場 長光<br>寺島 俊郎　近藤 尚義<br>黒岩 龍也　百瀬 忠幸<br>宇賀神誠司　小平 恵一<br>降籏 史敬　新海 節生<br>豊田 伸一　二木　明<br>中野 亮一　中浜　徹<br>山上 秀樹　高田　実<br>岡村 秀雄　河西 克造 |
| 調査員 | | 百瀬 陽三 | |

長野県埋蔵文化財センター年報　4　1987

発 行 日　昭和63年3月31日

編集発行　(財) 長野県埋蔵文化財センター

〒388 長野市篠ノ井布施高田字佃963の4
TEL 0262－93－5926

印　　刷　(株)中 信 社 佐久市岩村田1154-8
TEL 0267-67-2152